ISSN 2435-4279

紀要

成安造形大学附属近江学研究所

第11号 — 2021

JOURNAL OF OMI MULTICULTURAL INSTITUTE OF
SEIAN UNIVERSITY OF ART AND DESIGN NO.11 — 2021

目次

滋賀県愛知郡愛荘町・常照庵の木造不動明王二童子像の考察 …… 3
—常照庵の木造不動明王二童子像の研究Ⅱ—
髙梨　純次　公益財団法人秀明文化財団理事（MIHO MUSEUM 研究・展示担当）／成安造形大学附属近江学研究所客員研究員

比叡山焼き討ちと天正の復興 …… 11
—明智光秀の果たした役割—
和田　光生　大津市教育委員会文化財保護課主査／成安造形大学附属近江学研究所客員研究員

「里山における自然資本の意識化と
ネットワークのための地域参加型研究」の報告 …… 25
永江　弘之　成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員
大原　歩　成安造形大学非常勤講師／成安造形大学附属近江学研究所客員研究員／京都大学大学院技術補佐員

下仰木の「十王堂」…… 49
—地域のお堂が果たす役割—
加藤　賢治　成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長

近江の懐をめぐる 5 …… 59
石川　亮　美術家／成安造形大学准教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員

滋賀県愛知郡愛荘町・常照庵の木造不動明王二童子像の考察

―常照庵の木造不動明王二童子像の研究Ⅱ―

公益財団法人秀明文化財団理事（MIHO MUSEUM 研究・展示担当）／成安造形大学附属近江学研究所客員研究員　髙梨　純次

滋賀県愛知郡愛荘町・常照庵の木造不動明王二童子像の考察 ―常照庵の木造不動明王二童子像の研究Ⅱ―

公益財団法人秀明文化財団理事（MIHO MUSEUM 研究・展示担当）／成安造形大学附属近江学研究所客員研究員　髙梨　純次

Name:
Junji　TAKANASHI

Title:
An Inquiry into the Wooden Fudo Myoo Nidoji Statues of Joshoan in Aisho-cho, Aichi-gun, Shiga Prefecture: Part Ⅱ of the Study

Summary:
Continuing from the first study, I examine the wooden Fudo Myoo Nidouji statues at Joshoan based on the results of my field research. Their form and style indicate that these three statues were produced by a workshop of the Kei School, the school to which Unkei and Kaikei belonged. I also examine the similarities among these three statues.

はじめに

滋賀県東部、湖東と呼ばれる地域の中で、天台宗の三つの古刹を「湖東三山」と呼び習わしている。そのうちの一つ金剛輪寺（滋賀県愛知郡愛荘町）は、開基を行基、慈覚大師円仁の中興と伝え、中世には多くの子院が建つ有力な天台寺院であった。その一角に寺跡を伝える常照庵は、彦根藩主井伊家の家老木俣守安の妻女で法名常照によって承応二年（一六五三）以前に建立されたとみられる[註1]。この常照庵は、現在、わずかな寺地と小堂を残すのみだが、木造阿弥陀如来坐像一軀と木造不動明王二童子像が、重要文化財に指定され、もとは庫裏であったと伝わる場所に建つ文化財収蔵庫に安置されている。

筆者は、前号において、常照庵の木造不動明王二童子像について、調査の報告を行い、特に彩色についての私見を述べた[註2]。前稿では、調査で得られた成果について報告するに留め、像の評価をはじめとして、この優作を考えるについての見解などは全て行わなかった。今回は、前稿で報告した知見を踏まえて、不動明王二童子像についての卑見を述べてみたい。

一、木造不動明王像の検討（写真1・4）

中尊は像高一〇八・五センチ、巻髪で左肩に弁髪をやや短めに垂らす。額に皺を表して、両目を見開いて瞋怒し、唇を上牙下出して噛む。いわゆる安然が説いて台密で主流をなし、また東密の淳祐も説く十九観不動明王の面相をベースにしたものであろう。胸飾、臂釧、腕釧、足釧をつけ、右手で利剣、左手で羂索を握り、条帛をめぐらし、裳を着け、腰布を巻いて正面で結び、両先を股間の左右に垂らす。現状は、框の上に置かれた岩座に、足裏の角柄をさして立っている。前稿では、正面股間を中心として鮮やかに残されている彩色は、大正十三年の修復時に、周囲の彩色文様を詳細に検討して復元されたのではないかとした[註3]。両脇侍との比較検討も後に行うことになるが、三尊ともに鮮やかな彩色で荘厳されていたことに違いはない。

構造については、頭体幹部を針葉樹材（ヒノキ材と思われる）一材から造り、前後に割矧ぎ、割首として内刳りする。面部は別材製として玉眼を嵌入し、両膝以下足柄までを幹部材に差し込み、背面裳先など、適宜に別材製としている[註4]。

さて、像の評価に移りたいが、一見して極めて整った全体感になる完成度の高い優作である。巻髪の立

体的で変化をつけた表現と付置、後頭部に髪束が垂下して先端を巻く様など、自在な動感がみて取れる。面部については、特に右側は修補を検討すべき余地があるものの、左眉のエッジを利かせた表現、小鼻から頬にかけての筋肉質、下唇を噛んだ時に現れる下顎の丸みから三道にかけての肉感溢れる立体表現など、まことに秀逸である。この優れた肉感表現は、胸から腹にかけての明快な括れや、両上膊への自然なつながりなどにも認められよう。

着衣についてみてみると、その表現や全体的なバランスも秀逸である。条帛は布の質感をよく表現しており、正面の衣褶は下から上へと積み上げられた様な段差をもって表している。背面についてはそれほどの段差をもたせてはいないが、脇腹から背中にめぐる部位の表現などは、正面側の括れなどとリンクしたものである。腰布も結び目を精緻に表し、衣褶表現も同心円状に彫出し、背面では、中央に微妙なタックをつけるなど変化をつけることも忘れてはいない。裳は腰で折り返し、正面右脚の内側あたりで打合せ、膝下あたりまでを覆って裾は少し左方になびく。衣褶は、正面では打合せ方向に収束させる様に降るものが中心で、背面では大きくV・U字型に表す。裳については、截金による地文様と鮮やかな彩色文様で荘厳されるところであり、正面側は忠実な復元、背面には当初の文様が、褪色しているとはいえ、残されている。いわば、裳については彩色文様が主体となって表されるという造形意識をみて取ることができよう。

これらの表現を全体としてみてくれば、優れた技量を持つ新しいタイプの作者・工房として、慶派を想定するのが妥当であろう。頂上に沙髻を彫出し、巻髪を太く大きく配置する頭髪の仕様は、従来の、頭部にやや細かく密に配置する種類のものとは異なる動的な印象を与える。この様な巻髪の表現は、図様だけからすれば、運慶が文治二年（一一八六）に造像した、伊豆・願成就院の不動明王立像に近いものである（厳密にいえば、正面髪際から二段目あたりにかけての巻込は逆になるが）。願成就院像と共通するのは、両目を見開いて上牙下出する点も同じであり、裳の衣文が正面中央の打合せ部に降りてゆく表現にも近いものがある。運慶像との関連でいうと、截金の地文に大きく鮮やかな彩色の団花文などを配する点なども、高野山・八大童子像の特に恵光童子像の仕様などに近いものがある。表面の仕上げ等についても、高野山像などを念頭においての可能性を求めておきたい。

中尊像は、慶派の工房による作とするのが妥当であろう。願成就院像との形式的な親しさを覚えるのであり、また表面処理の仕様からしても、運慶の造像を規範としての可能性を指摘しておきたい。しかし、その穏やかさは、願成就院像などとはおよそ異なる造形感覚になるもので、あくまでも工房内での継承といった性格とするのが妥当であろう。しかし、全体的に安定したバランスをはじめとして、単純な同心円を描く様な衣文表現などからすれば、時期的に大きく下がるものとはいえない。条帛の立体的に繰り返される衣文の流れなどは、無位時代の快慶作阿弥陀如来立像の穏やかな衣文の流れに共通するように思われる。厳密な制作年代の判定は将来の課題としておきたいが、概ね、十二世紀末から十三世紀初頭の頃と想定しておく。

二、両脇侍像の検討

続いて、両脇侍像についてみてゆきたい。最初に、右脇侍の制吒迦童子半跏像である。

制吒迦童子像（写真2・6）は、像高三六・七センチ、坐高三〇・二センチ。髪は総髪として後方に流し、先端を巻く。両目を見開いて右前方を睨み、開口して怒号する表情。肩布で胸と両肩を大きく覆い、正面の先端は右胸から腹部を左に横切って左腰脇に至る。腰布と裳を着け、趺坐する右脚の前を垂下する形で左脚を立膝とする。右腕は垂下して体重を預けるように岩座について、宝棒を握る。左手は左脚に置いて、肩布の垂下部を握る。彩色は、白地彩色で、肉身部は赤系の彩色とし、着衣には截金の地文をおき、その上に彩色文様が施されているが、いま一つ判然としない。構造は、前面材の比率が大きい前後二材製で、割首として内刳りし、内部を黒漆塗りとしている。両脚部や肩以下などを別材製とする。

矜羯羅童子像（写真3・5）は、像高五四・〇センチ。髪は平彫とし、側頭部に耳の上あたりから美

豆良様の膨らみを表す。瞳を右に寄せて開き、閉口する。胸飾と臂釧・腕釧・足釧で飾る。条帛を着け、やや短めの裳を左からの布を外にして正面で打合せ、腰布を腹前で縛って着ける。右腕は垂下して蓮華の長い茎を執り、左腕を屈臂して独鈷杵を握る。腰をやや右に捻って岩座上に立つ。白地彩色で、肉身部は、一般に矜羯羅童子については白とするものが多いが、朱系とみられる。着衣の彩色については比較的に残りがよく、地色の上に截金の地文様をおき、彩色の団花文などを描いている。構造は前後の割矧造で割首として内刳りし、両肩以下などを適宜に別材製としている。

両脇侍については、制吒迦童子像が半跏座、矜羯羅童子像が立像と姿勢を違えるので、比較検討に難があるが制吒迦童子像は、体を右後ろに体重をかける複雑な全体観ながら、見事な表現に至っている。表情は童子のそれとは言いにくく、憤怒相の鬼神の如きものとなっている。しかし目鼻の表現、特に上下の歯列と舌、唇の動きなどは秀逸である。着衣についてみてみると、肩布が腹前を横に靡いてゆく質感と動感などは、自在な動きがあって優れている。彩色文様についても、右膝から脛辺りに残された二種類の団花文など、緻密な筆使いによるもので、整備された造像工房の存在が想定されよう。その作風からして、慶派の作とするのが妥当であろう。制作時期については、その表情は、迫真的であり、一二一〇年代後半から二〇年代にかけての作とされる京都・大報恩寺の十大弟子像などに通ずるもので、この頃を一つの目安とするべきであろうか。

矜羯羅童子像は立像であり、やや右前方を見据え、腰を右に捻った姿勢で立っている。この像で特徴的なのは、いわゆる美豆良を表していることであろう。いくつかの図像を検討してみても、美豆良を結った矜羯羅童子像は見当たらない。しかし、高野山・明王院の不動明王二童子画像、いわゆる「赤不動」の矜羯羅童子は、胸前で合掌する手勢で杖を立てているが、耳を覆って毛先が丸く膨らんで表されている。また、前記した高野山の八大童子像中の矜羯羅童子像の場合、耳後ろを垂下した髪の下端が、丸まって球状に表されている。『覚禅抄』に掲載される矜羯羅童子図像の注釈には、「形如十五歳童」とあり[註5]、あるいは聖徳太子十六歳孝養像に範を求めたとするのは穿ち過ぎであろうか。彩色についても、特に裳の截金による麻葉繋ぎの地文に、小さな花弁を巡らした菊花文の様な花を四方に配した団花文などは、その地文とともにゆったりとした優雅さがあり、前代の穏やかな文様表現を伝えている。矜羯羅童子像については、その体勢にしても、平安後期の動きの少ない優雅さを残している様に見受けられる。しかし分節的な括れを表し、着衣のやや複雑化した服制、厚みのある衣文表現など、鎌倉時代に至っての作としてよい。その表情なども、慶派の童子形にみられる表情であり、優れて綿密で丁寧な完成度を示している。十二世紀末から十三世紀初頭の造像としておきたい。

三、全体的な検討

以上、不動明王立像とその両脇侍について検討を加えてきた。いずれも、慶派の手になる優作といえるが、この三軀は一具としてのまとまりがあるのかについて検討してゆきたい。

というのも、最初に述べた様に、常照庵は、近世に至って、彦根藩家老の木俣守安の妻女によって建立されたことが明らかであり、この三尊像とともに、半丈六の木造阿弥陀如来坐像も伝えられているからである。当然、造像当初の安置場所より移動しているということであろうし、その間に様々な変遷があったことが想定される。常照庵の創建についての事情と、これら伝えられた諸像の伝来についての考察は、改めて試みてみたいが、とりあえずは、この不動明王二童子像の一具性を検討しておきたい。

構造については、中尊像と矜羯羅童子像が割矧ぎ・割首とするもので、制吒迦童子像は前面材の比重が大きい前後二材製としている。構造の違いは、立像と半跏像と姿勢が異なることもあり、一概に判断はできない。着衣の彩色については、いずれも截金の繋ぎ文様の地文に、彩色の文様を大きく配することが基本となっている。中尊像と矜羯羅童子像の裳の文様は、円の中に花文を四方に配するものを基本とした団花文が目立つ。制吒迦童子像は判然としないところもあるが、八弁花を大きく描いている様で、いずれにしても造像当初は、截金と繧繝彩色などを多用した鮮やかな彩色による、華麗な表面処理に覆

われていたことであろう。この表面の彩色なども、三者にそれほどの大きな違いは見出せない。

しかし、矜羯羅童子像の瞳は右斜め前方を睨むようであり、制吒迦童子像も右斜め前を睨みつけている。とならば、どちらも中尊の右側に安置されるとするのが妥当かとも思われるが、これを一具とすれば、眷属像が片側に二軀配置されていたという理解になろうか。不動明王三大童子五部使者像などでは[註6]、一方向に眷属が複数描かれる事例があるが、三尊形式であったならば、両脇に配されるのが一般的といえよう。一般的という理解が成り立つとすれば、脇侍の一方が立像でもう一方が半跏像とするのも、この時期の作例としては異例といえようか。中尊像と矜羯羅童子像の体の構えを比べてみると、中尊像はほぼ直立するとはいえ左足をやや外に向け、矜羯羅童子像は、腰をやや右に捻って左足を外に向け、そして瞳を右に寄せている。背面からの体の構えについていうと、上げ下げしている腕は左右逆だが、頭部から肩にかけての広がり、量感のある背中、下半身の着衣の流れと裾の広がりなどに共通性が認められる。衣文表現についても、その流れは比較的に単調だが、立体的な衣文表現には親しさがある。

一方、中尊像は新しい時代の流行に敏感であり、矜羯羅童子像は、中尊像に比べるとやや保守的な趣がある。しかし、小心な矜羯羅童子像の経典等に説かれる性格からしても、その穏やかな表現を、前代の静かな作風に求めたとも考えられよう。といってみても、矜羯羅童子像の時代に適合する刀技・彫法は、新時代の洗練された優れた表現に至っており、中尊像と一具になる脇侍像としてよい。制吒迦童子像については、刀技・彫法などに中尊像と共通する点も認められ、造像時期を大きく隔てるとは思い難いが、前記した一般論としての理由などからして、一層の検討を要しよう。しかし、この三像は、慶派が介在した十二世紀末から十三世紀初頭、あるいは十三世紀の十年代あたりに造像された、完成度の高い優れた作例と評価できる。

註

1. 『近江愛智郡志』巻五「第十章　秦川村　常照庵」の記載、および掲載史料による。なお、木俣守安や関連史料について、彦根城博物館渡辺恒一氏よりご教示を得た。

2. 高梨純次「滋賀県愛知郡愛荘町・常照庵の木造不動明王二童子像の調査報告」『成安造形大学附属近江学研究所　紀要』第十号　二〇二一年

3. この様な卑見に対しては、幾人かの先学より疑問を呈された。これについては、卑見を断言できる証拠を持たない。乏しい経験からではあるが、この様な部位にのみ、当初の彩色が鮮やかに残されているという事例は極めて珍しいのではないかということと、色料の発色や厚みなどが、この像の制作時期の事例とは異なる様にみえるということでしかない。また、前稿で示した、大正十三年修復時の「修理設計書及見積書」に記載がある色料や金の多様さである。この見積書に揚げられている色料は、この復元作業に用いられたのではないかと思う。当初の彩色がかなり残されていて、わずかに補彩や補筆したという様にはみえない。しかし、この復元については、前稿で一部を掲載した赤外線撮影なども参考にすれば、当初の地色や文様が想定できるほどに残されているのであり、それらを詳細に検討されて行われたものと思われる。決して、独善的に想像を逞しくして復元されたものではないと思う。従って、当稿では、この鮮やかな彩色も踏まえながら、論を進めてゆくことにしたい。

4. 法量、形状や構造等の調書的な詳細は、前掲2を参照されたい。なお、前稿では「閉口して上下牙出」としたが、上牙下出と訂正する。なお、調査時には、面部、特に玉眼の透明度や目の彩色などから、面部自体の後補も含めて、補彩や修補の可能性が検討された。面部右側の擦れの様なものがみえる部位などには修補の手が入っているかと思われる。しかし、幹部材との表現のつながりや、特に全体的な違和感に乏しいという様な見解に至り、厳密には検討課題としながらも、面部は当初のものと判断した。

5. 『覚禅抄』巻第七十八　不動法上（大正新脩大蔵経図像部五）

6. 作例としては、いずれも重要文化財に指定される「絹本著色不動明王三大童子五部使者像　延暦寺」や「絹本著色不動明王三大童子五部使者像　園城寺」などがある。

写真 1 木造不動明王立像

写真 2 木造制吒迦童子半跏像・右脇侍

写真 3 矜羯羅童子立像・左脇侍

写真 4 不動明王像　裳背面の文様など

写真 5 矜羯羅童子像　裳背面の文様など

写真 6 制吒迦童子像　裳右側面の文様など

比叡山焼き討ちと天正の復興

―明智光秀の果たした役割―

大津市教育委員会文化財保護課主査／成安造形大学附属近江学研究所客員研究員

和田　光生

比叡山焼き討ちと天正の復興
―明智光秀の果たした役割―

大津市教育委員会文化財保護課主査／成安造形大学附属近江学研究所客員研究員　和田　光生

Name:
Mitsuo　WADA

Title:
The Siege of Mount Hiei and Tensho Reconstruction: The Role Played by Akechi Mitsuhide

Summary:
Oda Nobunaga burned down Hieizan Enryakuji Temple, one of the most famous temples in Japan. It was a retaliation against Enryakuji's warrior monks for their opposition to Nobunaga, but the act is etched in Japanese history as an expression of Nobunaga's brutal character. Nobunaga's vassal, Mitsuhide Akechi, was long thought to have admonished Nobunaga for this plan, but his letters reveal a different picture. In this section, we will consider how Mitsuhide approached the burning of Mount Hiei based on the limited data available.

はじめに

『天台座主記』、天正七年（一五七九）の記事は、不思議な内容が記されている。

下坂本ノ城主浅野弾正長吉後改二長政ト一寄附シ二材木ヲ一助ク二大宮ノ再造ヲ一、先キレ是ヨリ南光坊擬講祐能為二本願ト一企ツ二大宮ノ再建ヲ一（下略）［註1］

天正七年、南光坊祐能を本願として、日吉社大宮の再興が企てられ、坂本城主だった浅野長吉は、それに応じて材木を寄附した、とある。この再興は、織田信長在世中であったので、密かに進められたとも書かれている。

比叡山焼き討ちで灰燼に帰した延暦寺・日吉社の再興に関する記事の嚆矢と言え、『新修大津市史』十巻の年表でも採録されている（本文では触れられていない）。浅野長吉（一五四八―一六一一）は、豊臣秀吉の家臣で、天正十一年（一五八三）坂本城主となり、同十四年ごろ大津に城を移した人物である。坂本城主時代、坂本町中定書を出し復興した坂本の振興に努めており、坂本とのゆかりから、この記事も自然に受け止められてきたが、そもそも天正七年の坂本城主は、明智光秀である。

この時、浅野長吉は、羽柴秀吉の家臣として行動を共にしていたはずで、坂本との接点は皆無だった。坂本に縁もゆかりもない浅野が、織田信長在世中の天正七年に日吉大宮再建のため材木を寄附したというのは無理がある話と言える。信長に遠慮して密かにこの寄附を行ったとされるが、その必然性がこの時点での浅野には見当たらない。

では、この記事をどのように受け止めれば良いのだろうか。素直に天正七年坂本城主だった明智光秀が寄附したと読み替えてみてはどうだろう。『天台座主記』が書かれた時点では、明智光秀の名を出すことがはばかられ、浅野長吉に仮託し、光秀の功績を残したと読みとることはできないだろうか。もちろん、『天台座主記』の記事を信頼したうえでという前提であるから無理のあることは否めない。

この記事の前にもう一ヵ所、気になる記事が『天台座主記』にはある。元亀二年（一五七一）九月十二日の条は、比叡山焼き討ちの記事であるが、そのなかに、異本として首楞厳院記家蔵本（叡山文庫別當代蔵）の記事が載せられている。そこには、比叡山焼き討ちの計画を、その直前に聞かされた明智光秀が、織田信長の暴挙を強く諫める話が詳細に描かれている。ただこの記事の文脈は、信長の居城を安土城とし、焼き討ちのため信長が草津に陣を敷いたところで、はじめて光秀が焼き討ち計画を聞かされ

る等、明らかに史実と異なる話である。後世に付加された記事であることは明白だが、ドラマや小説で、織田信長を諫める明智光秀というイメージの典拠になった一つである。

それはともかく、後世に書かれたとはいえ、こうした物語を『天台座主記』に挿入していることは、延暦寺にとって光秀は謀反人でなく、好意的な武将として映っていたことの表れと受け止めても良いのではないか。もちろん、天正十二年（一五八四）の横川中堂勧進状では、光秀を焼き討ちの張本人としており、一概に言えないことは確かである。

穿って考えれば、比叡山焼き討ちを行った織田信長を、本能寺の変で討った光秀は、間接的に比叡山の敵討ちをしたと映っていたのかもしれない。比叡山の仇を光秀が討ち果たしたという理解だが、のちの延暦寺における信長の評価は、必ずしも恨むべき対象と見ていない。むしろ、元亀二年、信長が比叡山を焼き討ちしたことを必然と受け止めていた節がある[註2]。そのことから考えると、光秀による「敵討ち」という短絡的な評価も慎むべきかもしれない。

ではなぜ、後世の延暦寺における光秀像が、好意を寄せるべき武将となったのだろうか。それはどのような理由からだったのか。このことを直接語る史料は全くない。このため、ここからは思い付き、妄想の批判は否めないが、以下、光秀と比叡山について考えてみることにしよう。

一、元亀二年の明智光秀　和田秀純宛光秀書状

元亀二年（一五七一）、光秀は宇佐山城（大津市南滋賀町）を任される。前年の志賀の陣で森可成が守っていた城で、浅井・朝倉、比叡山、一向衆など反信長勢力が跋扈する湖西の最前線、京都への東の口を任されたことになる。この宇佐山城で、光秀がどのような活動を行っていたのかについては、雄琴（大津市雄琴二丁目）の土豪和田秀純に宛てた九月二日付けの書状によって、その一端をうかがうことができ、近年、多くの研究者に注目されてきた[註3]。

和田は、六角の系譜を引くとの家伝を持つ雄琴の土豪だが、その出自は判然としない。雄琴のうち、南雄琴の在地土豪として和田はあり、前年の志賀の陣では浅井長政方として活動したと家伝に記されている。この和田に対し、光秀が味方になるよう働きかけ、同じ北雄琴の土豪八木[註4]と同心して、それに応じることを決断し、その旨を光秀に伝えた。書状は、その決断に対する礼と指示が記されている。

書状は、「御折紙令拝閲候、当城へ被入之由尤候、誠今度城内之働古今有間敷儀候、八木方ニあひ候てかんるい（感涙）をなかし（流し）候」という文言ではじまる。八木が和田秀純の書状を携え使者として宇佐山城におもむいた。昨年まで反信長方であった在地土豪の訪問は、城内を混乱させたのだろう。八木がどのように事を納めたかは判らないが、光秀が八木に会って「感涙を流した」と言っているから、その行動と決断がよほど嬉しかったのだろう。

この時点で、滋賀郡内において信長方と言えるのは、前年の志賀の陣で信長に味方した堅田の国人猪飼野・馬場・居初あたりで、新たに雄琴の和田・八木が加わったことになる。地の利を得ていない光秀にとってこうした在地土豪の支援は心強いことだったと言えそうだ。

ちなみにこの書状の中で、「堅田よりの加勢の衆、両人親類衆たるべく候か」という文言が見える。和田は猪飼野等と親戚かとの問いかけである。定かなことは不明だが、猪飼野や居初と雄琴の土豪たちに縁戚関係があってもなんら不思議はなく、むしろ、近隣とのネットワークを構築していたと考えるべきだろう。変化の激しい時代、周辺の情報も動静も分からぬままでは、戦国の荒波に飲み込まれる可能性があった。だからこそ、信頼できる近隣との関係構築は、重要だったことだろう。想像をたくましくするならば、光秀からの誘いも猪飼野などを介して伝えられたのかもしれない。

この書状で多くの研究者が注目しているのは、後半に出てくる「仰木之事ハ是非共なてきりニ可仕候、頓而可為本意候」という一文である。この書状が、比叡山焼き討ちの十日前に出されていることから、焼き討ちを前提に、「仰木を皆殺しにしよう、すぐにそうなるだろう」と言っている。「なでぎり」というショッキングな文言は、温厚な武将光秀のイメージを払拭する言葉である。

この注目すべき文言に続いて、書状は信長の動向

を伝えている。朽木成綱からの情報として「昨日志村之城［　　］ひしころしにさせられ候由候、雨やミ次第、長光寺へ御越し候て」と書かれている。志村城は、東近江市新宮町にあったとされ、六角氏に仕え、反信長として籠城していたようだ。一説には本願寺に呼応して反旗を翻した、ともされる。『信長公記』に「九月朔日、信長公しむらの城攻めさせ御覧候」と見え、信長の動向が逐一光秀に報告されていたことが分かる。光秀が、和田秀純に対し、信長の動きを正確に伝えているのは、何を意味するのだろう。

これまで光秀は、比叡山焼き討ちに批判的で、不本意ながら参加した、もしくは『天台座主記』にあるように、信長を諫めた武将というイメージで語られてきた。しかし、この書状から、光秀が仰木を皆殺しにしようと言っているように、積極的に、そして覚悟を持って比叡山焼き討ちという計画に臨んでいたことが読み取れる。また、和田・八木への懐柔も、比叡山焼き討ちを前提として働きかけていたことは確かだろう。単に味方になるように働きかけるのであれば、武器弾薬の提供や「なでぎり」などの具体的な行動を書き記す必要はなかったはずだ。また、正確に信長の動向を伝えているのも、比叡山焼き討ちの刻限が迫っていることを知らせる意図と読み取れるのではないか。

つまり、宇佐山城に入った光秀は、春もしくは初夏の段階で、比叡山焼き討ちを実行するための準備を綿密に行っていたと言えそうだ。

信長家臣団として新参者で、足利義昭の家臣という立場でもあった光秀にとって、宇佐山城主という役割は、大抜擢と言える。それに応えるべく、信長の命に懸命に励んでいたことは想像に難くない。ただ、「なでぎり」といった指示をしていることからすれば、光秀自身も、比叡山焼き討ちは避けては通れないハードルと考えていた節がある。

ちなみに、仰木は比叡山三塔の一つ横川の麓にあたり、現在でも横川とのつながりが深い地域である。横川の門前町という位置付けで、里坊に類する施設もあったのではないかと想像される。だからこそ、比叡山焼き討ちのターゲットになっていたのだろう。

こうして明智光秀は、比叡山焼き討ちを前提に、山麓の土豪を懐柔し、周到な事前準備を怠らなかった、という姿が垣間見えてくる。

同じ元亀二年のものと考えられる明智光秀書状がもう一通残されている。草津市にある天台宗の古刹、葦浦観音寺に宛てたもので、和田秀純宛書状の一カ月前、八月二日付けである［註5］。

内容は、光秀が、三雲高治方（湖南市三雲の土豪）に宛てて飛脚を遣わすにあたり、通行の安全に配慮してほしいと芦浦観音寺に依頼したものである。

芦浦観音寺は、永禄十一年九月、織田信長により禁制の高札を授けられており、同年六月と考えられる織田信長判物で寺領を安堵されている。信長は、足利義昭の上洛に備え、その準備を永禄十年末から周到に整えていたとされ、芦浦観音寺への寺領安堵もその一環だったのだろう。そもそも芦浦観音寺は、周辺の湖上水運や陸上交通に一定の影響力を持っており、六角氏もしばしばその力を頼っている。上洛を目指す信長にとって、是非とも気脈を通じておきたい寺だったからこそ、上洛の月に禁制を発給したのだろう。その後も岐阜と京都を往還する信長にとって、芦浦観音寺は通行の安全を確保するため、頼りにすべき寺であった。元亀元年には、永原城に居た佐久間信盛の書状が残り、信長及びその配下の武将と良好な関係を築いていたようだ。

光秀の書状には、「随而来十八日　殿様御働必定候間、可被成其御心得候」という文言が見える。『信長公記』にはこの言葉通り、八月十八日に織田信長は岐阜を発ち、近江に入って、浅井方を攻めたのち、湖東の一向一揆の拠点を攻め、続いて比叡山焼き討ちを行っている。芦浦観音寺にどの程度の情報が伝えられていたかは定かでないが、信長出陣の正確な日時を伝えていることは、最終的に比叡山焼き討ちにつながることを示唆しているとも深読みできる。この書状にある「殿様之働必定候」が意味する中身が問題となるが、普通に考えれば、単に信長が上洛する日程が確定したから、そのように心得ておいてほしい、という意味に読み取れる。周辺の交通に一定の影響力を持っていた芦浦観音寺に対し、事前に信長軍の通行時期を伝えておくことは、必要な配慮だったのだろうが、それが光秀の役割だったかは疑問だ。少しうがちすぎかもしれないが、この点を後

で考えてみたいと思う。その前に焼き討ちの状況を諸資料から整理しておく。

二、比叡山焼き討ち

比叡山焼き討ちを記した『信長公記』には、残忍な殺戮が行われた様子が描かれている。まさに「なでぎり」の世界である。

早朝より比叡山に取り掛かった信長軍は、日吉社・延暦寺の堂舎を焼き払う。攻め寄せる信長軍に対し、坂本の老若男女は逃げまどい、ことごとく八王子山へ逃げ上るが、打ち果たされていく。「僧俗・児童・智者・上人一々に頸をきり、信長公の御目に懸け、是は山頭（三塔）において其隠れなき高僧・貴僧・有智の僧と申し、其外美女・小童其員を知らず召捕り、召列れ御前へ参り、悪僧の儀は是非に及ばず。是は御扶けなされ候へと声々に申上候といへとも、中々御許容なく、一々に頸を打落され、目も当てられぬ有様なり。数千の屍算を乱し、哀れなる仕合なり。年来の御胸朦を散ぜられ訖。」まさに修羅場である。

元亀二年九月十二日、信長軍は、僧俗の区別なく、女子供の区別もなく、凄惨な殺戮が行われていたことが読み取れる。実際に阿鼻叫喚の世界が繰り広げられていたのだろう。こうして日吉社をはじめ、山上の根本中堂などの堂舎がことごとく焼き尽くされた。この焼き討ちによって、信長が抱いていた年来の「胸朦」（胸のつかえ）が散ぜられたと『信長公記』は記している。前年の志賀の陣で、比叡山が浅井・朝倉方に味方し、苦境に立たされたことへの恨みが、これで晴らされたと読み取れる。河内将芳氏も指摘しているように、日吉社の神体山である八王子山や山上の堂舎までは、信長軍も攻め上がってこないだろうと、山上へ逃げ立て籠もっていたところを、ことごとく焼き討たれたのである[註6]。

このあと「去て志賀郡明智十兵衛に下され、坂本に在地候なり。」と『信長公記』にあり、この功績によって、明智光秀は滋賀郡を任され、坂本に城を築くことになる。ではその功績とはどのような内容だったのだろう。この点を考えていきたいが、もう少し比叡山焼き討ちの状況を整理しておく。

この出来事を、京都の人々はどのように受け止めたのだろうか、山科言継の『言継卿記』から見てみよう。京都の街中からは比叡山が焼かれる炎や煙が実際に見えていたことだろう。現場に居るわけではないが、その惨状が次々に伝えられ、切実に受け止めていた。

九月十二日条には、「織田弾正忠、暁天（夜明け前）より上坂本を破られ放火、次に日吉社残らず、山上東塔、西塔、無動寺残らず放火、山衆悉く討ち死に」と状況を記し、「僧俗男女三四千人切り捨て、堅田等放火、仏法破滅、説くべからず、王法いかにあるべきや」と記している。町人も含め三・四千という数が討たれたと彼の耳には入っていたようだが、実際の数は不明である。「仏法の破滅」、「王法いかにあるべきや」という山科言継の嘆きは、当時の人々が一様に受け止めた正直な思いだろう。この時代「王法仏法相依」という考え方を人々は強く持っていた。天皇・公家や武家による政治支配秩序（王法）とそれを支える仏法が車の両輪のように相互に依存して国家を支えるという考え方である。王城の鬼門を守護する権門延暦寺は仏法の代表といえ、それが消滅した衝撃は、不安以外のなにものでもなかったことだろう。

この渦中で命を免れた日吉社社家生源寺行丸は、『日吉社兵乱火災記』[註7]に次のような体験を残している。

その概要は、行丸とその息子行広、樹下資継、樹下成前の四人が内陣に参籠していたところ、尾張の兵が乱入し、内陣の四人は丸裸にされて、放り出され、大床に出たところへ永原衆の下人が坂本で奪ってきた破れ帷子をくれた。それを着て永原軍にまぎれて逃れ命拾いをした。翌十三日には仰木陣屋より山中木屋へ立ち寄り、南庄から伊香立へ逃れた、とある。

行丸等を逃がした永原衆は、佐久間信盛の配下の者たちだろう。行丸の記録をもう少し見てみると、社家中の家族も逃散し、生き別れたこと、日吉社・延暦寺・上坂本の町や堂舎が焼かれたこと、そして「八王子山前後討死一千人に及ぶや、ただし多少は勘知せざるなり、六親離別の愁嘆悲涙やまず」とある。

行丸は焼き討ちの原因を、「近来諸人悪行の間、神明仏陀天上虚空に居座や」と、人々の悪行で神仏

が虚空に逃げ去ったためではないかと言っている。

焼き討ちの前年三月、多聞院英俊が延暦寺を参拝したおり、「（山上の）堂も坊舎も一円はてきれたる（荒廃）体なり、僧衆はおおむね坂本に下りて乱行、不法限りなし、修学廃怠の故、かくのごとし、一山相果てる式なりとおのおのこれを語る」（『多聞院日記』）との印象を語っている。どこか行丸の述懐と通じるものがある。

戦乱がうち続くなか、命からがら生き延びた行丸でさえ、焼き討ちを織田信長の暴挙と捉えていなかった。むしろ世の中が荒廃し、人心も乱れていたことを原因と見ている。その中には、延暦寺大衆の僧侶らしからぬ生活も含まれていたことだろう。その結果、神仏の罰が下されたと受け止めていたようだ。

後世の物語であるが、『猿鹿懺悔物語』[註8]にも「延暦寺の悪徒ほしいままに悪逆無動の構えを企て、碩学密徳の教化にも乗らず、また有験の行者の下知にも従わず」「山王大師の冥助にも背き、神明仏陀の冥罰と覚ふ」といった文言で、当時の姿を語っている。権門延暦寺が持っていたはずの矜持が失われていたことを要因として語っている。

実際のところ『信長公記』の記事にあるような惨劇が繰り広げられていたのだが、とはいえ日吉社司行丸父子のように、混乱の渦中にあって、逃げ延びた者もいた。行丸は、翌日朝に「仰木陣屋」へ逃げ、そこから山中を南庄、伊香立に逃れている。仰木は、明智光秀が和田秀純に「なでぎり」にしようと語っていた地で『言継卿記』では、この日仰木や南庄に信長軍が攻め寄せていたことになっている。行丸の書きぶりからすると、身を隠しながら山中を逃げており、緊迫した状態だったのだろうが、信長軍の存在には触れていない。

比叡山焼き討ちとはいえ、広大な比叡山を取り囲み、隙間なく攻めることは不可能である。おそらく兵火をかいくぐり、逃れた僧も多くいたことであろう。この惨劇を逃れた僧たちが、後の天正期の復興で中心的な役割を果たすことになる。そのことに触れる前に、坂本で焼け残ったとされる寺院について見ておく。

三、比叡山焼き討ちをまぬがれた寺　聖衆来迎寺

比叡山麓にあって焼き討ちをまぬがれた寺もあった。比叡辻の聖衆来迎寺（大津市比叡辻二丁目）である。同寺の歴史を記した『来迎寺要書』には、元亀元年「志賀の陣」の緒戦で、宇佐山城主だった信長家臣森可成は、進出してきた浅井・朝倉の大軍に挑み、あえなく討ち死にしている。聖衆来迎寺の住持真雄は、この森可成の遺骸を夜の闇にまぎれて寺に運び弔っている。「真雄上人と坊主一両人は本堂阿弥陀尊の前にて念仏執行、森三左衛門可成公討死を聞き届け、夜陰に忍び出て、御死骸當寺へ納め入る。」[註9]と伝えており、真雄にとって森は、危険をおかしてまで弔うべき人物だったようだ。

聖衆来迎寺は信長の重臣を弔った特別な寺ということになる。それが理由だったかは定かでないが、比叡山焼き討ちの時、聖衆来迎寺の関係者、什物は、事前に避難していた。

この時、真雄上人前方承知せしめ、本尊什物寺中の諸道具真俗（親族）共に船に取り乗せ、江州吉川へ馳せ付け、兵頭（主）神主衆が頓足に海辺へ出迎え、社壇籠居の体たらくなり、極月中旬まで滞留し、然る処、坂本漸く静かに成ることを聞き届け、坊主一両人召し連れ坂本へ罷り出、柴庵を作り極月末に至る、皆々帰寺致すなり（『来迎寺要書』）

聖衆来迎寺は、京都岡崎にあった元応国清寺の末寺である。応仁の乱以降、元応国清寺は荒廃し、什物は坂本の末寺に移されていた。この寺は、円頓菩薩戒の灌頂儀礼を行う寺であり、国家にとって不可欠の存在であったから、実体は無くとも元応国清寺は存続し、灌頂にかかわる尊像や什物、聖教は、大切に護られていたのである。そしてこれらは、聖衆来迎寺に引き継がれ、近世以降、聖衆来迎寺は元応国清寺を兼ねている。『来迎寺要書』には、坂本にあった元応国清寺末寺は、ことごとく焼失したように書かれているが、関係の尊像や什物・聖教は、聖衆来迎寺に今も伝来している。おそらく真雄によって避難した結果だろう。

また、聖衆来迎寺には国宝「六道絵」が伝来している。横川霊山院の宝物だった六道絵も、いつごろか聖衆来迎寺に伝来し、焼き討ちの惨禍をまぬがれ

たようだ。この寺は、近江の正倉院と呼ばれるほど多くの貴重な文化財が伝来している。そのすべてとは言えないが、多くは焼き討ち前に伝来し、惨禍を逃れたのであろう。

注目されるのは、真雄が、事前に焼き討ちを知っていて、寺宝や什物、寺にかかわる人間すべてが避難していることである。寺を空っぽにするわけだから、事前に情報を得て準備していないと対応できない行動だ。多くの寺宝が護られてきたことから、『来迎寺要書』の記事は信頼できると考えると、この情報はどこからもたらされたのだろうか。

想定できるのは、明智光秀サイドからの情報提供と考えるべきだろう。森可成を弔った特別な寺、という関係性が奏功したのかもしれない。

ここから見えてくることは、光秀が宇佐山城にあって、比叡山焼き討ちの地ならしを行っていたのではないかという想像である。具体的には、雄琴の土豪和田宛の書状が物語るのみだが、聖衆来迎寺や延暦寺の一部の関係者にもこの計画が伝わっていたのではないだろうか。

そもそも比叡山焼き討ちは秘密裏に行われた行為ではない。元亀元年秋、「志賀の陣」で浅井・朝倉軍は、比叡山の支峰に立て籠り、山麓には織田信長軍が陣を敷き、にらみあう膠着状態が続いていた。浅井・朝倉軍に味方した延暦寺に対し、信長は手を切るように交渉していたことが『信長公記』に見える。

信長は山門領を安堵する代わりに仏門に仕える身として、中立を保つよう比叡山に申し入れていた。そのうえで、この申し入れを受け入れなければ「根本中堂・三王（山王）廿一社を初奉り、焼き払はるべきの旨なり。」との意向を伝える。しかし比叡山からは、なんの返事もなく「浅井・朝倉贔屓せしめ、魚・鳥・女人等迄上させ、恣の悪逆なり。」（『信長公記』）というありさまであった。

信長は、中立を保たなければ、比叡山・日吉社を焼き払うと伝えている。しかし延暦寺はまったく取り合わず、浅井・朝倉に味方し、「ほしいままの悪逆」と言われる仕儀を続けていた。この対応が、翌年の比叡山焼き討ちにつながる、というのが『信長公記』の書きぶりである。この流れで言えば、信長は比叡山焼き討ちを事前通告していたことになる。

延暦寺は、それをあくまで脅しと受け止め、真剣に取り合わなかったのだろう。ただこのやりとりは、延暦寺大衆が共有していたはずだ。延暦寺が物事を判断する場合、僉議（衆議）が普通の進め方で、重要な決断が執行部（執行など）のみで行われることはなかったと思われる。『信長公記』を信頼する限り、正式な申し入れがあったのだから、衆議で諮られたと考えるべきだろう。志賀の陣の膠着状態の中、人々にこの情報は広まっていたとも思われる。河内将芳氏は、ルイス・フロイスの書簡を参照しながら、山門大衆は、信長の焼き討ちを察知しながら、日吉社や山上の堂舎まで破壊するような罰当たりなことはしないだろうと認識していたと推測し、その認識の乖離が焼き討ちの惨劇に至った契機ではなかったかと指摘している。[註10] そうであれば、信長の言葉を脅しと受け止めず、いずれ焼き討ちが行われる、と受けとめた僧もいたはずだ。時代の流れと、織田信長という武将の思考を分析できる情報を得られた僧に限られるかもしれないが。この点を、比叡山復興との関係から次に検討してみたいと思う。

四、比叡山焼き討ちを逃れた僧たちによる山門復興

天正十年（一五八二）六月二日、織田信長は明智光秀によって討たれる。本能寺の変である。その光秀も羽柴秀吉との戦いに敗れ、あえない最期を遂げた。信長の死によって比叡山はその呪縛が解かれ、復興への機運が一機に加速する。各地に逃れていた僧侶が比叡山に戻り、復興のための活動をはじめる。

『天台座主記』天正十年十一月六日の条には表1の僧たちが復興のため駆け付けたと載せられている。織田信長が討たれて五ヵ月後のことである。そこには三十二名の僧があげられている。これに続く文章で、復興を担った僧の役割が見えており、豪盛・祐能が、比叡山で再建の準備を差配し、全宗と詮舜が、羽柴秀吉との折衝を担当。ただ、秀吉の許可をなかなか得られず、豪盛・全宗が止観院（東塔）、詮舜が宝幢院（西塔）、亮信が楞厳院（横川）と、三塔の核となる山坊をまず復興させたと記されている。

正式に根本中堂と戒壇院の勅許が下りたのは天正十二年（一五八四）五月である。[註11] これら主要な堂舎の復興のほか、帰山した僧たちは多くの山坊の

復興に着手していた。

ここに見える比叡山復興の魁となった僧たちの多くは、焼き討ちを逃れた僧である。『信長公記』の記述では、焼き討ちにより延暦寺は壊滅し、僧たちも悉く首を刎ねられ、逃れたものは皆無のように読み取れる。しかし、惨禍を逃れた僧も一定程度あったのである。

そして、ここに挙げられた三十二名の内訳を見てみると、三塔十六谷のうちに偏りがあることが見てとれる。十六谷で見ると、西塔南尾と横川般若谷が欠けている。復興に駆け付けた僧の数も、東塔西谷が五名、西塔北谷が八名となっており、他の谷に比べれば、突出して多くの僧が集合している。復興に尽力した主要な僧の名を挙げているので、実体は定かでないが、谷によって偏りがあったことは確かだろう。彼らは、比叡山焼き討ちに際し、たまたまうまく逃れることができたのだろうか。それとも、万全の準備を整え、その時を迎えていたのだろうか。

その実態を知る手がかりとして『叡山三塔堂舎並各坊世譜』[註12]から、検討してみる。この資料は、復興期から正徳年間までの各院坊主の記録をまとめたもので、各院坊の復興第一世を検討することで、それを担った僧が惨禍を潜り抜けたか否かと、復興のおおよその時期について、見当をつけることができる。

先の表1で『叡山三塔堂舎並各坊世譜』の記事も整理してある。当然『天台座主記』と重複するが、やはり目につくのは、西塔北谷の僧が多く難を逃れていることだ。元亀元年の多聞院英俊の記述に依るならば、比叡山上の堂舎に僧の姿はまばらで、皆山下の坂本に居たと伝えている。山上に居れば逃れる術もあったであろうが、同じように坂本に居たとすれば、特定の谷の僧だけが逃れているのは、やや不自然で何か理由があるのではないかと想像したくなる。

焼き討ち当時、西塔北谷の正教院には、詮舜が居た。天正期の復興で中心的な役割を果たす僧だが、彼は元亀二年八月に光秀が書状を送っていた芦浦観音寺と深いつながりのある人物である。そこで改めて芦浦観音寺と詮舜、そして西塔北谷の関係について見てみることにしよう。

五、芦浦観音寺と詮舜[註13]

草津市芦浦町に所在する芦浦観音寺は、聖徳太子開基と伝える古刹だが、寺の歴史が確認できるのは中興以降の応永年間からである。

芦浦観音寺に残る最古の古文書が享徳二年（一四五三）九月二十三日「室町幕府御教書」で、寺領安堵する内容である。『観音寺由緒記』[註14]は、後世のものであるが、この寺領安堵に関連して「湖上管船ノ事ヲ命ゼラル」と見える。享徳年間と断定することはできないが、湖岸に近い芦浦観音寺が早くから近辺の水運管理に関係していたとの伝えになっている。ただ、それを検証する史料は見られない。

また、明応七年（一四九八）八月二十六日の「六角奉行人連署奉書」は、「芝（芦）浦観音寺山王江毎月為御代官参詣、殊坂本江御用所等被仰付之間、毎度以此御過書無其煩可被勘過由也」とあるように、芦浦観音寺が日吉社への参詣や延暦寺御用で坂本へ渡航することが多かったために、過書が発給されている。宛所は、「諸関奉行御中、同志那渡」となっており、芦浦観音寺に最寄りの志那浦から坂本へ渡航していた。この時点では、水運を管理するという側面は見られないが、同寺は比叡山延暦寺の末寺であり、坂本との頻繁な往来は、湖南の山門領、東海道や中山道の交通に一定の影響力を持ち、延暦寺の活動の一端を担っていたことをうかがわせる。

ここで注目したいのは、中興第六世秀範以降の芦浦観音寺住職の動向である。秀範（大永年中〔一五二一〕頃）以降、第十二世豊舜まで（寛文五年〔一六六五〕）の約一五〇年の長きにわたり、坂本（下阪本）四ツ家（大津市下阪本一丁目）に住まいし、後に芦浦へ移る西川家出身の住職が続く。西川家は、もともと武蔵国児玉党に属していたとするが、戦乱の中で近江に逃れ、蒲生郡金田村から坂本四ツ家に移ったのが秀範の父「久徳三河守藤原光時」とされる。したがって、秀範は、「江州志賀郡坂本四ツ家之里に出生仕候」と「観音寺歴代系図」[註14]に見え、その本姓は西川氏であった。

秀範の後を継いだ七世慶順は、秀範の附弟で、父は「坂本四ツ家之里住西川光行」である。光行は、光時の子とされるから、秀範と慶順は叔父と甥の関係になる。この慶順について「観音寺歴代系図」には

「信長公御代天文廿辛亥年より天正四丙子年迄、廿五年之間勤役仕」と見え信長との関係を記している。

永禄十一年九月、信長は芦浦観音寺に禁制を与えており、その年は、足利義昭を奉じ上洛した年にあたる。『信長公記』には、六角氏を退け、九月二十四日守山まで進んだ信長は「翌日、志那・勢田の舟さし相ひ、御逗留。廿六日、御渡海なされ、三井寺極楽院に御陣をかけられ、諸勢大津の馬場・松本に陣取り。」と見え、翌日足利義昭も渡海している。芦浦観音寺は、こうした手配に尽力したのであろう。したがって、天文二十年という記事は、間違いだが、信長上洛以降関係を深めたことが想像される。安土城築城以前の信長の拠点は岐阜城であり、京都と岐阜を往還する信長にとって、近江の地は、安定させておく必要があった。そのため、元亀元年五月には、永原城に佐久間信盛、長光寺城に柴田勝家、安土城に中川重政、宇佐山城に森可成を配している。この構図の中で芦浦観音寺が果たす役割も大きかったことだろう。

佐久間信盛や明智光秀が芦浦観音寺を頼ったのも、同寺が信長と良好な関係を保っていたからといえる。慶順は、天正五年（一五七七）に亡くなっている。その前年、信長は岐阜城から安土城に居を移しており、天下人としての新たな一歩を踏み出している。それを見届け、慶順は亡くなり、その跡を賢珍が継いでいる。

第八世賢珍の父は、坂本四ツ家之里に住む西川光綱で、光行の子である。この光綱は、天正二年（一五七四）に芦浦へ移住し、芦浦観音寺の家臣となっており、西川家が同寺とより深くつながることになる。賢珍は、「信長公秀吉公御代勤役仕天正十七己丑二月朔日寂」とあり、天正十七年（一五八九）に亡くなっているが、信長、秀吉の御用を勤める寺であったことに変わりない。そして賢珍の跡を継いだのが第九世詮舜で、賢珍の附弟であり、実の弟であった。

詮舜の業績は、西塔瑠璃堂横に立つ「舜公碑銘」という石碑に刻まれている。元文二年（一七三七）二月藤原常雅（花山院常雅、一七〇〇－七一）によって撰ばれ、藤原隆英の書とある。詮舜の事績が刻まれており、『天台霞標』や『西塔堂舎並各坊世譜』に採録されている。現在の芦浦観音寺住職西川浄海氏が著された『芦浦観音寺探訪』[註13]に導かれてその概略を紹介する。

詮舜は、天文九年（一五四〇）頃に生まれている。幼い頃から「出塵の志」があったが、兄賢珍がすでに出家していたために父に反対される。しかしその強い志で説得し、十四歳で西塔正教坊詮運阿闍梨に従い出家する。詮舜は、真摯に仏教に取り組んでいたが、その環境は良好なものではなかった。

当時の僧侶は、向上して精進することを止め、やりたい放題であった。しかし、その道を志す僧侶もいたので、邪正は入り交じっていた。遺された教えが失われていくばくか。元亀年間に、比叡山の仏刹は、兵乱で放火され、建物が壊される目に遭う。僧侶は離散し、阿闍梨（詮舜）は逃げて観音寺に身を寄せた。仏に誓って曰く「吾は素から志願が有ったが、然るに今遂に困難に出会う。本山は焦土となったが、いままで一日も志を忘れたことはない。唯、冀くば仏刹が以前のように復旧し、僧侶が再び集まらんことを。もし事、就らざれば再生を期して、もって我志を遂げん。」（西川氏の現代文に若干手を加えた）

焼き討ちに関する記事で、再生してでも延暦寺の復興を心に期す詮舜の気概が伝わってくる。焼き討ちが行われた元亀二年（一五七一）、詮舜は三十一歳、「元亀二年回峰苦行を修す」（『西塔堂舎並各坊世譜』正教院再興第一世詮舜の記事）とあり延暦寺の苦行である回峰行に取り組んでいた。詮舜が住持を勤める正教坊は、「北嶺回峰石泉坊流の行門室」[註15]とされ、彼も回峰行者だったのである。前年の志賀の陣で混乱する比叡山で、天台僧として回峰行に取り組む姿勢には、宗教者として真摯に仏法を求道する思いが伝わってくる。戦国の世にあって、祖師や先人の教えに学びながら、延暦寺の在り方を模索していたのではないだろうか。個人的な感想だが、この姿勢は、どこか慈円の若い頃と重なるように感じた。

改めて、比叡山焼き討ちを逃れた西塔北谷の僧と詮舜の関係を見てみると、同じ北谷浄泉坊良周は詮舜の「法属」、また北谷瑞雲院豪運は、「師伯詮舜」とあり、法類と言える。詮舜と志を同じくする僧は、彼の周りに集まっていたことだろう。想像でしかないが、詮舜は、芦浦観音寺経由で焼き討ちの可能性

を察知し、いち早く難を逃れたのではないか。また詮舜につながる僧たちも、同様であったかもしれない。その可能性を推測させる逸話として『西塔堂舎並各坊世譜』の中堂（転法輪堂）の項に、本尊の釈迦如来像について、次のような記事が見られる。

元亀の兵焚に、（本尊を）化人持ち去る、江州高島郡水尾邑に寄隠す、人これを知らず、天正の中、本山重復しめ、衆まさに新像を造らんとす、時に正教坊詮舜たちまち瑞夢を感じ、因て深くこれを怪しみ、すみやかに往きて像を彼において覚む、果たして得ること夢の告げに合ふ、大いに驚喜踊躍し、迎し来る之を奉る、実に天正十三年乙酉十二月二十八日也、

比叡山焼き討ちにまつわる霊験譚の一つで、高僧詮舜の逸話といえるが、もし彼が焼き討ちを事前に察知していたとすれば、西塔の中堂である転法輪堂の本尊を密かに疎開させていたと読み取ることもできるだろう。

詮舜は、延暦寺の仏教を真摯に求道する僧であるとともに、天正の延暦寺復興にあたって豊臣秀吉との調整役を務めるなど、権力者の信頼を得て大きな役割を果たした。世俗の論理にも長けた傑出した僧だったと言える。天正十七年（一五八九）観音寺住持となってからも、湖水船奉行を勤め、琵琶湖水運を管理し、秀吉の蔵入地の管理も任されており、秀吉に信頼された実務能力の高い僧という姿が浮かび上がってくる。「舜公碑銘」には、秀吉から還俗を勧められたが、断った逸話が見られるのも、並外れた能力の持ち主だったからだろう。慶長五年（一六〇〇）、詮舜は死の床にあって次のように言い残したと伝える。

徒弟に嘱して曰く、吾山今既に興復す、及び旧と蓄えし所の経論古書漸く集まる、僧徒もまたようやく帰れり、然れども往日の十が一にあらず、吾嘗て山上に就て三所に経蔵を建て、あまねく天下に告げて、散逸の書籍を探索し、以て収蔵せんと欲すの志ありて、いまだ遂げず、これうらむべし（心残り）、汝らこれを勉めよ、言い畢て、仏号を称し安詳として逝す、世寿六十一（「舜公碑銘」）

延暦寺におけるもっとも大切な営為、つまり天台仏教を学び修行し、様々な法会を営むためには、聖教が不可欠である。それは堂舎の復興と同じく重要なことであった。詮舜は、焼き討ちで散逸した経論を集め経蔵を建てる悲願を弟子たちに託している。この遺言は、第十一世舜興によって遂げられ、正教蔵として、現在西教寺に伝えられている。比叡山の復興は堂舎や尊像、什物などの復興とともに、聖教の整備が不可欠であった。江戸時代に入る頃に整備された天海蔵が最も充実した聖教と考えられるが、正教蔵や真如蔵（東塔南谷実蔵坊復興二世実俊による蔵書）など多くの聖教が整備されたことも注意すべきだろう。

それはともかく、限られた資料から見た詮舜像は、時代の転換点にあって、延暦寺の在り方、僧の在り方を深く考え、次の時代を見据えた延暦寺の再建に邁進した僧侶だった、と言えるのではないだろうか。

それは、焼き討ちにより一時この世から消滅した延暦寺を再興するため、全身全霊を傾けた、全宗や豪円など多くの僧に共通する志だったように思える。

中世、権門寺院として大きな力を振るっていた延暦寺は、戦国時代の変化の中でその存続が危ぶまれる状況に陥っていた。その実感を心ある僧は誰もが持っていたのかもしれない。比叡山焼き討ちという不幸なイニシエーションを経ることによって、近世延暦寺へと脱皮することができたとするならば、その犠牲はあまりにも大きかった。

六、明智光秀と施薬院全宗

最後に、再び明智光秀に戻って考えてみよう。

光秀をめぐる元亀三年の次のエピソードが気になっていた。光秀は坂本城主の傍ら京都代官も兼ねており、その京都での宿が徳雲軒、すなわち施薬院全宗宅であったと早島大祐氏は『明智光秀　牢人医師はなぜ謀反人となったか』[註16]で指摘されている。『兼見卿記』元亀三年九月十七日条に「明智十兵出京也、為見廻罷向了、逗留徳雲軒也」と見えるもので、焼き討ちの翌年、光秀は徳雲軒宅に京都見廻りのため逗留していた。

この記事を読んだとき、不思議な感じを持った。というのも、天正の比叡山復興で、詮舜とともに秀吉との交渉を担った施薬院全宗である。彼は著名な医師として知られるが、一方、横川で修行した天台

僧であり、焼き討ちを逃れ、京都で医師として暮らしていた。

比叡山を焼き討ちされた側の全宗が、翌年には焼き討ちした側の光秀に「京都のお宿」を提供しているのが不自然に思えたからだ。単に光秀の命令に逆らえなかったのかもしれないが、実は以前から何らかの関係があったのではないかと疑ってしまう。また全宗は、元亀三年に光秀を迎えるほどの屋敷を京都に構えていたのだから、名医としての地位をすでに確立していたのだろう。単に比叡山から逃れた仮の宿とは思えない。

京都の情勢も安定しているとは言えない時期に、光秀を滞在させていることは、互いに深い信頼関係があったのではないかと想像され、以前から知己であったと見るのが妥当に思える。この点は、早島氏も指摘されており、その根拠として、光秀に医術の心得があった点に注目されている。近年の研究で『針薬方』という医学書の奥書に「明智十兵衛尉、高嶋田中籠城の時の口伝也」との記事が見え、光秀が医学の知識を持っていたことが確認されている。

この記事を永禄九年（一五六六）の出来事と早島氏は推定されており、光秀が越前に居た頃のことになり、足利義昭に仕える直前の出来事とされる。永禄十一年以前の光秀の事績は史料がなく、まったく不明ななかで、貴重な記事なのである。光秀がいつどこで医学の知識を学んだかは分からないが、それ以前であることは確かである。一方、全宗が医術をどのように習得したかも定かではない。もし光秀が学んでいた時期と重なるのであれば、全宗との接点も想定されることになる。そうであれば、上洛時から再び親交を深め、焼き討ち後の宿舎の提供も想定できる話である。かつ、全宗もまた、比叡山焼き討ちの可能性を事前に察知していたのではないかとも想像される。そこには、復興までのシナリオも含めて議論されていたのではないかと邪推したくなる。

はじめにで記したように、『天台座主記』には、天正七年、日吉大宮の復興にあたり、坂本城主浅野長吉が、ひそかに材木を寄附したことが記されている。当時の城主は明智光秀であり、浅野になっていることは疑問だと考えた。それに関連して、明智光秀が、坂本城を築城していた元亀三年のエピソードが『兼見卿記』に見える。光秀は、十二月十一日、坂本城築城中に、山王の敷地に城を普請したため美濃の親戚が病気になったと吉田兼和に相談している。そこで兼和は、「明十山王敷地安鎮之札」を遣わしている。坂本城本丸の南は七本柳と呼ばれ、日吉山王祭で御輿の船渡御が出発する場所である。その関連の船小屋などが、城の敷地となり、普請で取り壊されたのだろう。もしかすると、七本柳まで城の施設の範囲になっていたのかもしれない。ともかく、何らかの形で山王の敷地を浸食し築城したのだろう。日吉社も焼けてしまい、山王祭も実施できない状況で、それでも、山王の祟りを光秀は畏れていた。神仏を畏れる心を持った光秀という姿が浮かび上がる。

また元亀四年、光秀は今堅田の合戦で死亡した家臣を供養するため、坂本城の北西にある西教寺に供養米を寄進している。部下を思う光秀の人間性がうかがえるエピソードとして紹介されている。同じ坂本にあって、焼き討ちをまぬがれた寺として取り上げた聖衆来迎寺にも、天正五年九月二十七日仏供米として七十八石九斗二合を寄進している。同寺には、天正八年二月二十六日、丹波攻めを終えた光秀が、丹波から持ち帰った鐘が寄進されている。坂本城の北に位置し、西教寺とともに聖衆来迎寺も光秀の崇敬をうける寺であった。

坂本は、光秀にとって心安らげる場所であり、周辺の社寺への崇敬を怠らなかったことから思えば、はじめに触れた、天正七年に光秀が日吉社のため秘かに材木を寄附したことも、ありそうな話に思える。

和田家文書で読み取れるとおり、元亀二年の光秀は、宇佐山城にあって、比叡山焼き討ちの最前線で、その準備を怠りなく進めた。聖衆来迎寺が事前に対岸へ避難したことも、光秀の焼き討ち準備の一環と考えられないだろうか。詮舜や全宗が焼き討ちを無事逃れているのも、光秀の配慮だったかもしれない。

比叡山焼き討ちは、信長の戦略にとって不可避な行動だった。一義的には『信長公記』にあるように、浅井・朝倉に与した比叡山は、許すことができない存在だった。それは抵抗勢力の排除という意味だけでなく、河内将芳氏も指摘しているように、山門領の存在や今道越（山中越）など流通の問題を総合した、信長の戦略に則した行動だったと言えるだろう[註17]。

山門領について言えば、荘園制が崩壊しつつある

なかで、なお名目を保っていた各地の山門領は、武将たちにとって統治の障碍であったことだろう。また、流通という点からも、延暦寺・坂本を手中におさめることが重視されていたことだろう。東国・北陸からの物資は、琵琶湖水運を用いて南の玄関口坂本に陸揚げされ、京都に運ばれる。この流通の要を比叡山から奪うことは信長の戦略にとって必須だった。天正元年、明智光秀は、船を駆使して琵琶湖から浅井軍を攻撃しているように、信長は船戦を重視していた。後に坂本城・大溝城・長浜城・安土城と湖上のネットワークを形成しているのも、水運の機動力を意識した城づくりだったと言える。

信長にとって排除すべき対象は、権門として経済や流通、軍事・政治に関与する延暦寺だったと言えるだろう。

その意味で延暦寺を一時的にこの世からなくす、つまりリセットすることが比叡山焼き討ちの目的だったのでは、という想像が私の結論である。中世絶大な力を持っていた権門寺院を破壊することで、新たな時代を開こうとする信長の意思を、広く示そうとしたのではないか。その意義を光秀も共有していたからこそ、積極的に準備を進めたのかもしれない。ただ、光秀は心ある僧に避難を促し、再出発に備えさせたと考えられないだろうか。

本来ならば、天正の復興に携わった僧たちの事績を丁寧に整理して、考えるべき問題だが、わずかな事例による思い付きの議論しかできていないのは、筆者の力不足による。今後に期したいと思う。

また私事を加えるなら、そもそも私は、和田秀純の末裔として、この問題に興味を持った素人である。聖衆来迎寺も、檀那寺にあたる。そんな身近な因縁から、勝手な解釈をしてみたのが、本稿で、史料の解釈、目配りが不十分である点は、自覚しているつもりだが、大方の御理解を賜れば幸いである。

註

1. 渋谷慈鎧『校訂増補天台座主記』　比叡山延暦寺開創記念事務局　一九三五年。以下、『天台座主記』の引用は同書に拠った。
2. 吉田慈順「辰張忌考」『比叡山の仏教と植生』　法蔵館　二〇二〇年
ちなみに伝説は次のようなもの。
最澄は、比叡山を主宰していた振張から、十年間の契約で山を借り受けたが、その際とりかわした契約書には、いつの間にか十に一点を加え千年と変わっていた。この契約違反の恨みがシンチョウ（信長）の兵難となったという。
3. 概要は『新修大津市史』三巻　九十四－九十七頁　一九八〇年。翻刻は『新修大津市史』八巻　大津市　一九八四年。
4. 『新修大津市史』三巻では、八木を仰木の土豪ではないかと推測している。しかし、北雄琴に八木氏がかつて存在した記録があり（『村社雄琴神社記』）この場合は、雄琴の土豪の一人と考えた方が良いであろう。
5. 藤田達生、福島克彦編『明智光秀　史料で読む戦国史③』八木書店　二〇一五年。観音寺宛書状は三十六頁。
6. 河内将芳「山門延暦寺焼討再考序説」『中世京都の都市と宗教』　思文閣出版　二〇〇六年
7. 『神道大系　神社編二九　日吉』　神道大系編纂会　一九八三年で翻刻されている。
8. 田嶋一夫「早稲田大学図書館教林文庫『猿鹿懺悔物語』（翻刻）」『国文学研究資料館紀要』第三号　国文学研究資料館　一九七七年
9. 土井通弘「〈資料紹介〉来迎寺要書　三冊」『滋賀県立琵琶湖文化館研究紀要』第三号　滋賀県立琵琶湖文化館　一九八五年
10. 河内前掲書
11. 工藤克洋「秀吉と日吉社・延暦寺復興勧進」『歴史の広場』二十三号　大谷大学日本史の会　二〇二一年。天正の復興にかかる勧進を手掛かりに、復興の過程を論じている。
12. 天台宗典編纂会「叡山三塔堂舎並各坊世譜」『天台宗全書』第二十四巻　第一書房　一九七四年に所載
13. 芦浦観音寺については、現住職の西川浄海氏によって、関係資料を駆使した寺誌をまとめられている。『芦浦観音寺探訪』（二〇二〇年）がそれで、参考にさせていただいた。
14. 『大津市史』下巻　大津市役所　一九四二年　百艘船の項で翻刻されている「観音寺由緒記」・「観音寺歴代系図」を用いた。
15. 武覚超『比叡山諸堂史の研究』　法蔵館　二四五頁　二〇〇八年
16. 早島大祐『明智光秀　牢人医師はなぜ謀反人となったか』　ＮＨＫ出版　二〇一九年
17. 河内前掲書

表 1『天台座主記』天正 10 年 11 月 6 日記事及び『三塔各坊世譜』にある復興に尽力した僧

三塔十六谷	山坊名	僧　名	備　考
東塔東谷	薬樹院	全宗	
東塔東谷	（正覚院）	豪盛	初め薬樹院 1 世、天正 13 年正覚院 1 世
東塔南谷	南光坊	祐能	
東塔南谷	実蔵坊	実善	実蔵坊 1 世　天正　浄教・極楽・吉祥も復興
東塔北谷	慈光院	重順	竹林院 1 世　天正 20 年　不動慈光善光を建てる
東塔北谷	教王院	舜芸	信州仁科の人、教王坊 1 世　天正
東塔北谷	惣持坊	心盛	総持坊 1 世　天正 11 年
東塔北谷	蓮華院	仁秀	蓮花院 1 世　天正　日光院（放光院）兼
東塔北谷	観明院	舜慶	観明院 1 世は賢舜となっている
東塔西谷	行光坊	雄盛	行光坊 1 世　天正 11 年帰、12 年坊建てる
東塔西谷	覚林坊	実見	覚林坊 1 世　初め秀憲
東塔西谷	護心院（元仏乗坊）	秀珍	護心院 1 世　天正
東塔西谷	円教院（元吉祥院）	乗倩	円教院 1 世　天正
東塔西谷	光円院（摩尼蔵坊）	秀順	光円院（摩尼蔵坊）1 世　天正
東塔西谷	千光院（円常院）	盛俊	千光院（円常院）1 世　天正雄盛造営弟子盛俊院主
東塔西谷	本覚坊（今地福院）	円智（豪円）	備前遍照院・伯耆大山寺より来る。地福院 1 世　天正
東塔無動寺谷	宝珠院（大樹坊）	栄仙	宝珠院（大樹坊）1 世　全宗に協力する
東塔無動寺谷	十妙院（元実蔵坊）	賢栄	十妙院 1 世
西塔北谷	観音寺（正教院）	詮舜	正教院 1 世　天正
西塔北谷	正観院	舜慶	正観院 1 世　天正
西塔北谷	乗実坊（即心院）	豪堆（豪雄）	即心院 1 世　天正
西塔北谷	金台坊	尊運	愛宕松源院（所在不明）より来る。金台坊 1 世　天正末年
西塔北谷	浄泉坊（浄泉院）	良周	浄泉院 1 世詮舜　天正　良周 2 世
西塔北谷	瑞雲院（元教光坊）	豪運	瑞雲院（教光坊）1 世　天正
西塔北谷	正蔵院	春雄	正蔵院（起教坊）1 世　天正
西塔北谷	金光院	好運	金光院 1 世　天正
西塔北谷	栄泉院	源運	栄泉院 1 世　天正文禄
西塔東谷	宝幢院（今厳王院）	尊海	厳王院 1 世　天正　安祥院 1 世
西塔東谷	等覚院（真如坊）	舜慶	等覚院 1 世　天正 12 年
西塔東谷	寂光院	仙忠	寂光院 1 世仙重の師仙忠か　天正年中
西塔南谷	大仙院（大泉坊）	乗慶	大仙院 1 世　天正　（観泉坊大興坊建てる）
西塔南谷	行栄院	広清	行栄院 1 世　天正（善祥坊継潤〔秀吉家臣宮部継潤〕造営）
西塔北尾	尊林坊（今樹王院）	秀存	樹王院 1 世　天正
西塔北尾	大智院（西方院）	覚智	大智院 1 世　天正
横川兜率谷	恵心院	亮信	常州黒子千妙寺より来る。恵心院 1 世　天正 12 年
横川兜率谷	鶏足院	兼秀	雞足院 1 世　天正 12 年栄源に嘱
横川兜率谷	雞頭院	栄源	雞頭院 1 世は兼秀、栄源は 2 世（文禄 2 年寂）
横川香芳谷	定光院	亮栄	定光院 1 世　天正（太田牛一檀越たり）
横川飯室谷	松禅院	玄俊	松禅院 1 世　天正（師亮俊、六角義実・徳川秀忠・同夫人・蒲生秀行）
横川飯室谷	長寿院	光芸	長寿院 1 世　天正（唯心院も再興）
横川戒心谷	藤本坊（今大林院）	兼俊	大林院（藤本房）1 世　天正
横川解脱谷	福成坊（今恵雲院）	俊存	恵雲院 1 世　俊存の時復興したかは不明

天台座主記に見える復興に駆け付けた僧
三塔各坊世譜に見える焼き討ちを逃れた僧
三塔各坊世譜から類推される復興に駆け付けた僧

「里山における自然資本の意識化と ネットワークのための地域参加型研究」の報告

成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員　永江　弘之
成安造形大学非常勤講師／成安造形大学附属近江学研究所客員研究員／京都大学大学院技術補佐員　大原　歩

「里山における自然資本の意識化と ネットワークのための地域参加型研究」の報告

成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員　永江　弘之
成安造形大学非常勤講師／成安造形大学附属近江学研究所客員研究員／京都大学大学院技術補佐員　大原　歩

Name:
Hiroyuki　NAGAE　　Ayumi　OHARA

Title:
A Report on a Community-Based Participatory Research Project for Raising Awareness and Networking in Relation to the Natural Capital of the Satoyama

Summary:
Herein, we report on our research activities conducted in Moriyama Village, which is situated at the foot of Mt. Hira in Otsu City, Shiga Prefecture. Together with local residents, we investigated the wisdom, technology, and life of a satoyama village that coexists with nature. Through the practice of this community-based participatory research, we also examined the value of natural resources and the issues they face, as well as the ways in which social and community cooperation can be used to connect them to the future.

第一章　はじめに

里山は、それぞれの地域の気候や風土がもたらす農地や森林、水辺などの多様な自然と、地域の人々の生活・生業・信仰、年中行事などが結びつきながら、地域固有の文化や生態系が形成されてきた。

里山は、私たちの生活の中であまりにも身近で、そして当たり前すぎたがためか、その存在意義そのものが問われることは少なかった。今日、近代化や都市化により里山をとりまく環境は大きく変化している。薪や炭の需要が激減したことによる薪炭林の放置、過疎化や高齢化などによる農地の管理放棄、大規模かつ画一的な開発の進行による地域固有の景観の消失、生物多様性の低下、ごみの投棄による環境汚染など里山をめぐる問題は深刻である。そして、都市近郊のニュータウン開発によって移入者が増加する一方で、集落組織を通して伝統的に里山の利用や管理に直接関わってきた地域住民は減少の一途をたどっている。

一方、一九八〇年代以降になると、里山保全をめぐる活発な市民活動が各地でみられるようになり、里山の多様な機能と意義が認知され、行政や学問の

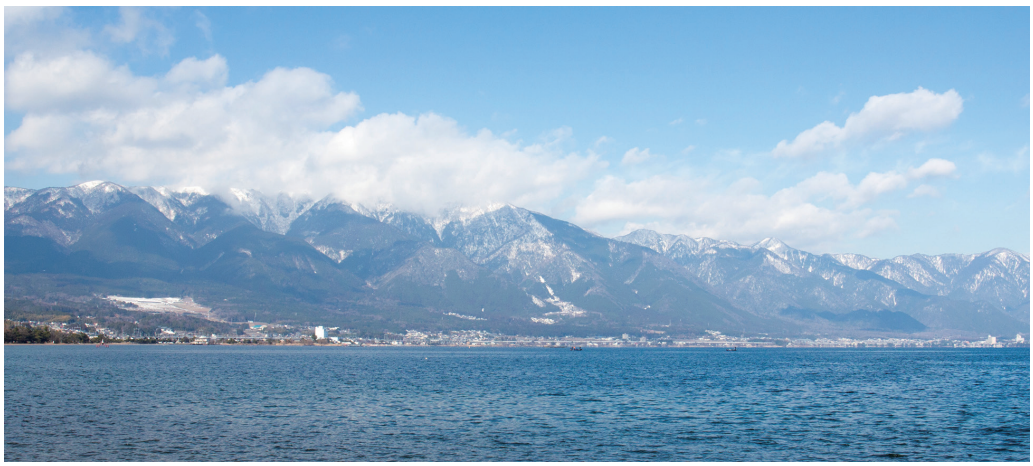

写真１　研究フィールドの比良山麓を和邇浜より遠望する

分野においても里山に対する関心が高まった。

自然科学および社会科学双方の観点から様々な里山研究が行われ次第にその成果が蓄積されるようになってきた。現在は、さらに里山における生態的な意義と文化的な意義を融合するための学際的な研究が求められている[註1]。

そうした背景の中、本稿は筆者（永江、大原）が科学研究費助成事業（基盤研究（B））「里山における自然資本の意識化とネットワークのための地域参加型研究」（研究代表者：深町加津枝／京都大学。以下、「里山科研」という[註2]）の研究分担者・研究協力者として、滋賀県大津市八屋戸の守山地区を中心とした比良山麓の里山のフィールドで、「地域固有の里山の知恵や技術を今日に活かし、未来につなげていくための社会・地域連携をいかに行うか」という視点で、地域住民の方々と共に、価値や課題を認識し、共有するプログラムとして取り組んだフィールドワークとワークショップおよび調査・研究について報告する。（写真1）

第二章　調査・研究の目的

二－一　「地域参加型研究」とその成果

フィールド調査で得た地域資源・自然資源の価値や情報を地域の人々と共有する機会は、簡単に得られるものではない。一方的に情報公開するだけではなく情報を分かち合い、情報を活用するには、地域と相互的な関係を継続しながら共にその機会を作ることが望まれる。

本研究では、研究代表者である深町が同地域に在住し、自身の研究フィールドとして地域住民との関係性を育んできたことが大きく作用している。研究開始当初から、深町を通して地域団体や個人の多くが研究に対して関心を持ち、協力的で主体的に調査に関わった。「地域参加型研究」として研究活動を共にすることで、その成果を還元し共有する地域の人たちや団体、活かしていく場面などを具体的に意識しながら研究を進めることができた。そして、研究成果は今後地域で活用できるように、よりよく地域に伝わり、より発展的で継続的な関わりを生み出すような企画やデザインが求められた。

本稿は、永江と大原が、里山科研の一環として地域の各種団体と取り組んだ「地域参加型研究」を報告する。第三章は「活動拠点としての古民家五郎助（古民家再生、活用）」、第四章は「五感体験アンケート」、第五章は「地域めぐるスタンプラリーと里山資源カード」、第六章は「比良山麓の石の文化サイクリングマップ」である。「地域参加型研究」として多くの地域団体、個人の方々に協力いただいた。それぞれの章で関わりのある団体を紹介する。

二－二　調査対象地

調査対象地の比良山麓一帯（ここでは旧志賀町の範囲）は、西に蓬莱山や比良山系の一〇〇〇メートル超えの山並みが連なり、東には琵琶湖（水面標高約八十メートル）が広がっている。山からの急傾斜地を流れる諸河川の扇状地の上の狭い範囲に田畑や宅地、京都と北陸を結ぶ西近江路（県道）が走っている。

そうした地勢により、冬には急斜面を駆け降りるように吹く比良おろしと呼ばれる強風が風害を引き起こし、また、大雨が降ると土石流が頻発し河川氾濫や水害などの自然災害と向き合ってきた地域である。一方で、雄大な比良山系から得られる豊富な森林資源を建築材や燃料、食材などとして利用し、また、土石流などで地表に露出した石を石材や庭石として利用し浜から舟運で琵琶湖湖岸や京都などの消費地に向けて運ぶなど、自然資源の恵みを産業にしてきた。（写真2・3）

調査の中心地となる大津市八屋戸の守山地区は、ＪＲ蓬莱駅にほど近く八屋戸に位置する約二三〇戸の農村集落である。比良山麓の東側の木戸学区に属し、古くは守山村と北船路村とに分かれていたが、明治七年（一八七四）五月に両村が合併し八屋戸村となった[註3]。元々、木戸との境界である野離子川の河口付近に集落があったが度重なる土砂災害により、現在の場所に集落を移転したと伝わっている。

写真２　山と湖の間の狭いエリアに里山が広がっている（守山地区）

写真３　浜まで続くかつての石出しの道（守山地区）

第三章　活動拠点としての古民家五郎助（古民家再生、活用）

三－一　概要

里山科研では、「地域参加型研究」の拠点となる守山地区内の古民家をお借りすることになった。この古民家は築一〇〇年以上がたち、隣接する土地へ新築ができる前までは母家として使用されてきた。茅葺屋根の平屋で、田の字型の座敷、たたき土間、土間から続くお台所にはカマド、薪で沸かす五右衛門風呂が現存している。守山地区の旧集落で一番山手に位置し、敷地内には、江戸時代頃に引水された用水路とカワトがあり、守山の昔ながらの暮らしをみることができる。家主Mさんは、守山地区で生まれ育ち、長男として地域の伝統的な年中行事や、祭事、自治活動に関わり、農作物を育ててきた。母家を何かに活用できないか、と家主Mさんに相談したところ、賛同いただき、里山科研と守山里山の会の共同で再生・活用することとなった。

この章では、この古民家を地域の暮らしの伝承の場として活用するため家主Mさんの屋号を用いて『古民家　五郎助（ごろすけ）』と名づけ、守山里山の会と共同で行った再生・活用への取り組みを報告する。

今年度で里山科研は終了するが、家主Mさんのご厚意と、地域の活動拠点として根づき始めたことから、この『古民家　五郎助』を活用した活動は継続していくことになった。守山の里山研究や活動、人々の交流の場として活かしていきたい。（写真４～９）

写真 5　古民家五郎助の玄関からたたき土間へ

写真 4　古民家五郎助の外観。奥の旧母屋を活動拠点として再生し活用する

写真 7　玄関前に敷き詰められた守山石が雨に濡れて美しい

写真 6　古民家五郎助は守山集落の一番山手で、集落の中心を通る石出しの道、山行きの道に沿って位置している

写真 9　タイル貼りの五右衛門風呂（使用不可）

写真 8　手入れをして使えるように再生したおくどさん

三－二　「守山里山の会」について

「守山里山の会」は、里山での暮らしの知恵や文化を学ぶ有志の会。守山地区の旧・新住民により構成されている（二〇一九年調査時会員数三十二名）。守山地域の自然や歴史・文化と結びついた場所や、「あぶらぼん」と呼ばれるキノコや「守山石」と呼ばれる石材などの自然資源、また地元にある森を利用してつくった石出車・トンボ車・竹籠など地域の暮らしや生業を支えた民具などを活用するためのワークショップの開催や、手づくり小物等の販売などの活動を行っている。

三－三　古民家の再生・活用に向けた取り組み

（一）実測調査

古民家は、当初柱や床、屋根瓦の損傷がはげしかったため、本研究活動の中で修繕・再生することを家主や守山里山の会へ提案し、実測調査、実測図面の作成、床板三間分の張り替え、補強する作業をワークショップ形式で行った。民家の実測調査は、成安造形大学住環境デザインクラス卒業生四名が実施した（二〇一九年七月）。家主から古民家についての聞き取り調査をし、損傷部分確認、再生ポイントの整理などの情報の取りまとめ、民家図面の作成が行われた。（図1）

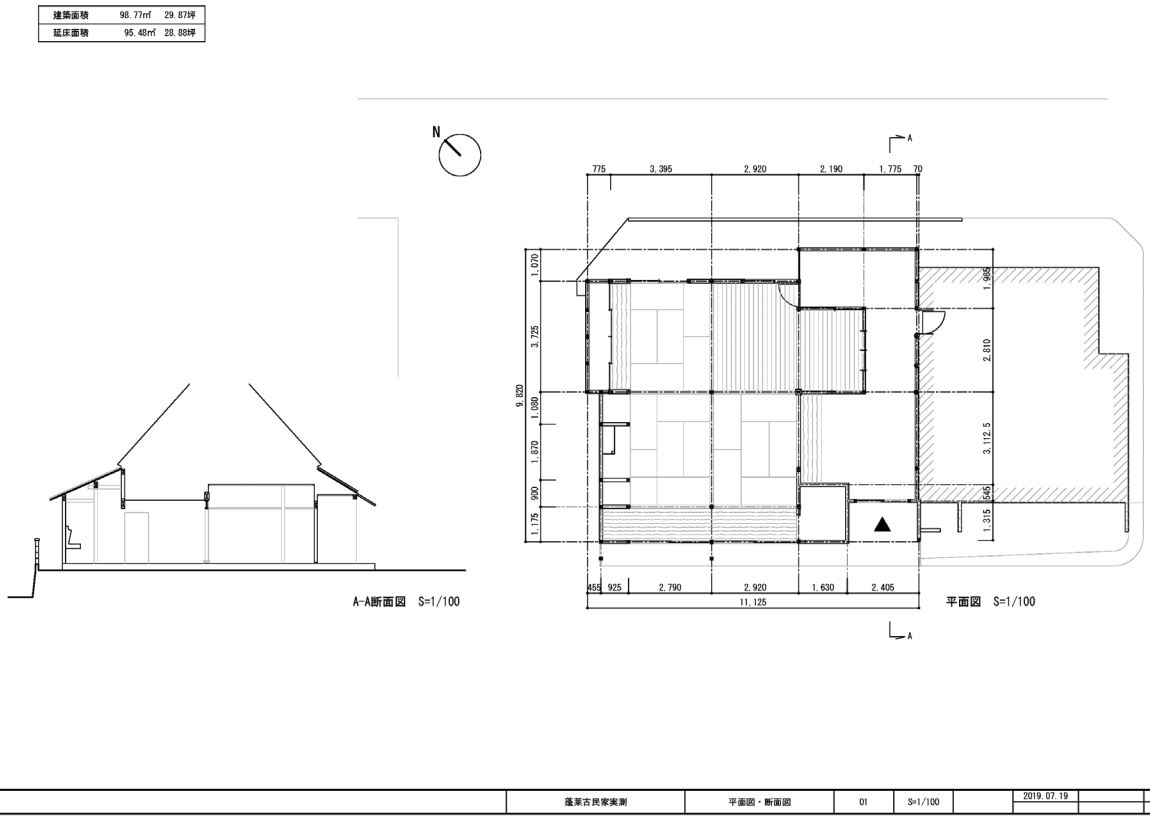

図1　古民家五郎助の実測図面

（二）古民家再生ワークショップ

古民家の再生ポイントを整理し、瓦屋根の修繕、家屋周りの掃除などが守山里山の会有志や協力者により進められた。守山里山の会とのワークショップでは、床材の張り替え、床材への柿渋塗りを実施（二〇二〇年二月～四月）。床下工事の際には、柱の基礎に守山石が使用されていることがわかった。床材の塗料は昔はベンガラを塗っていたことが地元大工の古老からの聞き取りでわかった。その後も、土壁の修復についての土採集や、守山里山の会の女性メンバーからのカマドでお米を炊きたい！　という希望により、カマド周りの掃除、台所の窓の改修など、地域団体と企画を共有しながら活動を進めている。（写真10～13）

写真10　床板を剥がすと守山石の基礎が並んでいた

写真11　柱の基礎の守山石

写真12　床板を張り直し柿渋を塗るワークショップ

写真13　活動拠点としての環境が整っていく

（三）展示発表スペースの整備

古民家五郎助を研究成果の発表の場として活用するために、壁二面の上部にピクチャーレールを設置し、古民家の雰囲気を妨げないように必要な時だけ有孔ボードに金具を取り付けて展示ワイヤーで吊したり連結して展示壁面として使えるようにした。有孔ボードを利用することで作品の二段掛けなど臨機応変に展示レイアウトを変えられるように工夫した。また、延長コードで簡易的にライティングを可能とした。作業には家主Mさんの協力が大きな助けになった。

古民家五郎助を地域コミュニティの拠点として今後も活用していく上で、集会やものづくりなどのイ

ベントだけではなく、作品や成果を発表する展示スペースとして活用の幅を広げた。

（四）民具の収集・調査・展示の計画

子どもの頃に山から石を運搬する「石出し作業」の経験がある大工の石塚定二郎さんは、守山の歴史や暮らしに詳しく、地域の歴史をまとめて執筆し、公民館講座の講師や、「守山里山の会」の顧問も務められていた。里山科研の研究でも、里山の先生としてたくさんの行事を指導いただき、信頼され慕われていた。

永江と大原は、二〇一六年に文化誌『近江学』第九号の記事[註4]の際にも、石塚さんから山仕事や石出し道のこと、守山の歴史や祭りについて多くの聞き取り・取材を行っている。石塚さんのご自宅にある作業場兼倉庫には、石塚さんが復元した守山石を産出する時に石を運搬する石出し車三台や大工道具、琵琶湖や河川の漁業の民具などが多数収蔵されていた。

また、守山地区には、山仕事や田仕事、衣食住の暮らしに関わる民具を所蔵する家もあることがわかってきた。

そうした守山地区独自の石出しの道具や里山の暮らしに根付いた民具を収集し、調査し、古民家五郎助などで展示を行い、文化を継承していこうということになった。

守山里山の会が民具収集・民具整理を実施し、里山科研が民具調査・記録を行った。

手順としては、守山の民具の戸籍をつくる（撮影・聞き取り・記録）、手入れ・保管、展示の流れで実施する計画を立てた。

民具の収集・調査・保存方法を学ぶため、二〇二〇年一月に二か所の先進地区を訪ねて研修を行った。午前に田上郷土史料館の収蔵庫を見学。東郷正文氏（田上郷土史料館館長・真光寺住職）より史料館の衣生活用具が二〇一九年二月に国の登録有形民俗文化財に指定された経緯についてお話しいただき、須藤護氏（民俗学者・龍谷大学名誉教授）から民具の収集・保存・調査に関するレクチャーを受けた。午後からは、琵琶湖博物館にて、渡部圭一氏（当時琵琶湖博物館主任学芸員・里山科研研究分担者）から、琵琶湖博物館の概要解説後、地下の民具収蔵庫を見学した。田上地区や琵琶湖博物館にはない山や石出しの仕事の道具が守山地区にはあることがわかり、守山地区でしか収集できない民具資料があることがわかったことで、守山里山の会のみなさんのモチベーションが上がったことを感じた。（写真14～18）

石塚定二郎さんの復元した石出し車や、民具を活用するために、石出し車の使い方や、石出しをしていた当時の様子について聞き取り（勉強会）を行った。また、各家にある民具を古民家五郎助に搬入した[註5]。（写真19）

民具の展示は、古民家五郎助を会場に「守山むかしのくらし展」を実施した。開催は二〇二一年十月十四日、守山自治会が主催するスタンプラリーと同

写真 14　田上郷土史料館館長の東郷正文氏によるレクチャー

写真 15　資料整理について学ぶ

写真17　琵琶湖博物館にて渡部圭一氏のレクチャー

写真16　田上郷土史料館を視察

写真19　石塚定二郎さんが復元した石出し車を囲み使い方や当時の様子を聞く

写真18　琵琶湖博物館収蔵庫を視察

日にし、多くの人が散策する際に立ち寄ってもらえるようにした。（次節三－四（三）参照）

三－四　古民家五郎助の展示スペースとしての活用実践

古民家五郎助を地域コミュニティの交流の場、活動拠点として集会やものづくりイベントなどに活用する以外に、「展覧会」など作品や成果の展示発表の場としての活用を企画し開催した。

（一）展覧会「五箇祭展」開催

主催：科研「里山における自然資本の意識化とネットワークのための地域参加型研究」

会期：二〇二〇年五月二日（土）～三日（日）

コロナ感染対策のために対象を地域の方、守山里山の会のみに絞って公開。

展示内容：

・写真展「守山の風景～五箇祭」（永江弘之）

・パネル展示「五箇祭いろはかるた」（山形歩）

・映像上映「五箇祭二〇一〇年」五十三分（山形蓮）

五箇祭とは、西近江路（旧北国海道）沿いの北船路、守山、木戸、荒川、大物の五つの集落を舞台に五月に行われる樹下神社（滋賀県大津市木戸）の例祭。

写真展は、二〇一六年に文化誌『近江学』第九号の記事[註4]のために五箇祭を取材した際の写真より二十点をA2サイズで印刷しB2パネル展示した。

「五箇祭いろはかるた」作者の山形歩さんは、守山地区出身で成安造形大学卒業生。本作品は二〇一

○年度の卒業制作作品。A4サイズの絵札と読み札（祭の解説付き）全ての原画パネルを展示した。

映像「五箇祭二〇一〇年」編集の山形蓮さんは、大物地区出身で滋賀県立大学卒業生。本作品は二〇一〇年の五箇祭で、本稿執筆の大原をはじめ協力スタッフが五つの集落にそれぞれ密着し、同時並行して進行する祭に同行し撮影した取材映像を編集した記録映像作品。大型モニターで上映した。

（二）里山研究展示 vol.1「五箇祭展」・古民家五郎助のお披露目

主催：科研「里山における自然資本の意識化とネットワークのための地域参加型研究」

会期：二〇二〇年八月八日（土）～十日（月）

展示内容：

・写真展「守山の風景～五箇祭」（永江弘之）

・パネル展示「五箇祭いろはかるた」（山形歩）

・映像上映「五箇祭二〇一〇年」五十三分（山形蓮）

※関連企画として、大物文化祭にて「五箇祭展」を開催した。

会期：二〇二〇年十一月二十三日（月）

会場：大物公民館

展示内容：

・写真展「守山の風景～五箇祭」（永江弘之）

・パネル展示「五箇祭いろはかるた」（山形歩）

・映像上映「五箇祭二〇一〇年」五十三分（山形蓮）

（写真20～22）

写真 20　五箇祭展　写真展示

写真 22　五箇祭展　映像鑑賞

写真 21　五箇祭展　カルタ展示

（三）守山里山の会主催「古民家五郎助　守山むかしのくらし展」

主催：守山里山の会

後援：科研「里山における自然資本の意識化とネットワークのための地域参加型研究」
総合地球環境学研究所「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」

会期：二〇二一年十一月十四日（土）

展示内容：

・民具：石出し車、ハシゴ車、石工道具、竹籠、柿渋紙の籠、漁具、茶壺、明治期の教科書など
・掘り炬燵、おくどさん、薪風呂、じゅんじゅん用ちゃぶ台
・チャナメツムタケ（アブラボン？）の資料
・近州音頭「守山版」の資料
・映像「守山にある山林の地名」（長岡野亜監督・出演：石塚定二郎氏）

（写真23～29）

写真23　カマドでごはんを炊いた

写真24　昼食の準備

写真26　昔の道具などを展示

写真25　手づくりの地元の味

写真 27　石工の道具など

写真 28　復元した石出し車の展示

写真 29　巨石の運搬に使っていた四つ輪

第四章　五感体験アンケート

四－一　概要

五感体験アンケートは、上田洋平氏（滋賀県立大学地域共生センター講師、心象図法の提唱者）考案の「地域住民に子供の頃からの五感体験、身体感覚を思い出して書き出していただき、その地域の生活文化を概観できるようにする調査手法」である。

二〇一〇年度～二〇一二年度に取り組んだ近江学研究「生活文化の聞き取り調査、及び、仰木ふるさとカルタ制作」では、滋賀県大津市仰木地区で「仰木ふるさと五感体験アンケート」を実施し、一次資料として整理し活用した。

本研究では「守山ふるさと五感体験アンケート」として実施した。二〇一九年八月に守山地区の地蔵盆（地蔵巡り）に合わせて「守山ふるさと五感体験アンケート」の紹介および協力をお願いするパネルなどを展示した。守山公民館の壁面をお借りして、主に「仰木ふるさとカルタ」の時の成果物を例として展示し、本研究の概要とアンケートの趣旨などを紹介した。五感体験アンケートの記入例、まとめ冊子「仰木ふるさと物語」、「五感体験のコメントカード」、仰木ふるさとマンダラの例などを展示した。

地蔵盆（地蔵巡り）やその後の夏祭りなどの地域のイベントや地域住民が集まる機会に順次配布して記入していただく予定だったが、コロナ禍による自粛や中止などで計画通りに進められず限られた成果となった。（写真30）

写真 30　地蔵盆に合わせて設置した五感体験アンケートを紹介し協力をお願いする展示パネル（守山公民館）

四－二　守山ふるさと五感体験アンケートの質問項目と記入例

アンケートの質問項目は、仰木でのアンケートをベースに、他の研究分担者への情報提供を意図して「方言や唄」や「当地におけるキノコについて」「守山地区の一年の暮らしの中の行事」の項目を追加した。以下が質問項目と記入例である。

・年齢
・性別
・守山地区に何年くらいお住まいですか？
・支障がなければ、ご住所とお名前をお教えください。

一．今も目に浮かぶ、当地のなつかしい風景、情景、建物や風物がありましたら、いくつでもかまいませんので、思い浮かぶだけご記入ください。
例・昔は麦わら葺きの屋根ばっかりやった。瓦屋根はなかった。（〇〇才の頃）
・一九〇〇（昭和〇〇）年頃まで、石出し車で大きな石を運んでいた。

二．耳に残る音、なつかしい音、当地で聞こえた印象深い音や声がありましたら、いくつでもお教えください。どんな些細な音でもかまいません。
例・夜でも水車のゴトンゴトンという音が聞こえとった。（昭和〇〇年頃）
・小学生の頃、石出し車のギシギシという音で、父さんが帰ってくるのが分かった。

三．なつかしい匂い、当地ならでは、またはその頃ならではの匂いだと思われるものがありましたら、いくつでもお教えください。
例・家の中に入ったら、どの家でも牛のにおいがした。（昭和〇〇年頃まで）
・小学何年生頃まで、朝は、おくどさんでごはんを炊く匂いがした。

四．今でも手足によみがえる感触、なつかしい手触りや肌触り、また、熱さ冷たさ、暑さや寒さ、痛さ、重さなどの体験がありましたら、いくつでもお教えください。
例・わら草履の冷たい履き心地が気持ちよかった。
・夏は川で魚つかみ。魚のヌルヌルした感触が忘れられない。

五．思い出の味、忘れられない味や、当地ならでは思われる味や食べ物などがありましたら、いくつでもお教えください。
例・よその家の干し柿をこそっと取って食べとった。
・村総出の「道づくり」で食べたお弁当、谷川の水で沸かしたお茶はおいしかった。

六．当地で使われている方言や、言葉の独特な使い方、また、ことわざや唄、はやし言葉、言い回しなどがありましたら、いくつでもお教えください。
※田植え歌や、石出し仕事の時、年中行事などで唄った歌などがあれば、ぜひ教えてください。
※校歌など今は歌われなくなった当地の歌などありませんか？

七．当地における「キノコ」について教えてください。
①当地で生える（生えていた）キノコで実物を知っているものを教えてください。
②その中で食べたことがあるものを教えてください。
③その中で自分が採ったことがあるものを教えてください。
④「あぶらぼん」と聞いて思いつくこと、思い出すことはどんなことでしょうか。

八．守山地区の一年のくらしの中で、地域やご家庭で行われている行事をお教えください。今も続いている行事でも、もう行われていない行事でも、些細なものでもかまいません。いくつでもかまいませんが、無理のない範囲で教えてください。行われる時期や特徴的な「使う道具」「お供えするもの」など内容も少し書き添えていただくと、より参考になります。
※五箇祭のことや、その他の祭行事のことなど、また季節ごとの節目の行事など。
例・毎年〇月頃に〇〇の御札をもらいに行って貼り替える。
・一月〇日　〇〇〇でどんど焼き。

九．その他、当地の暮らしの中での体験について、特に思い出されたことがありましたらお教えください。絵や図で示していただいてもかまいません。別紙添付でもかまいません。

・思い出すヒント・キーワード＝「衣」「食」「住」「冠婚葬祭」「結・村組織・コミュニティ」「遊び」「学

校生活」「生き物」「風景」「田畑仕事」「山仕事」「石出し仕事」など

四－三　守山ふるさと五感体験アンケートのまとめ

アンケートに記入いただいた内容をテキスト化したものを年齢降順で掲載する。質問項目は略記とした。回答された内容や漢字等の表記は、明らかに誤記と思われる部分は修正したが基本的に手書きの記入に準じた。

■九十二歳　女性
守山地区におよそ八十六年間住んでいます。（六歳までは京都市在住）

一．目に浮かぶ風景

・若宮神社の広場で夜、映画会が催され、筵の上に座って鑑賞した（昭和二十年代）。
・田んぼの虫を駆除するために行われた「虫送り」という行事があった。松明（たいまつ）を持って田んぼの畦を歩きながら虫を駆除するのである。

二．耳に残る音

・地蔵盆に私の父などが所属する講の人たちが、太鼓の音に合わせて念佛か音頭かを歌っていた。
・小学生（高学年）が、夜、火の用心回りをした。拍子木を首にかけて「火の用心ご用心」と唱えながら集落を回った。
・川に大きな水車を回して米をふむ。水車の回る音、杵の音がした。

三．なつかしい匂い

・お茶の葉を摘んで蒸してもんで、むしろの上に広げて乾かす。私の家では、十年位前まで毎年やっていた（お茶の葉のいい香り）。
・牛を飼っている家では、牛小屋の中の汚れた敷き藁を外に出して積んであった。雨が降ると独特のいやな匂いがした。

四．手足によみがえる感触

・川の水で米を洗い、ご飯を炊く。時には下手の方のしょうず（わき水）の所まで持っていって米をといだこともある。
・お風呂に水を張るのが小学校高学年位の子どもの仕事で、川から汲んできたバケツの水を高い窓からお風呂に入れるのが大変だった。

五．思い出の味

・夏休みに湖で泳ぐ時、胡瓜や茄子を持って行き、それを投げてそこまで泳ぐ。あとはおやつ代わりに食べたことを想い出す。
・そら豆を炒ったり、家で作ったかきもちを焼いたりする時の香ばしい香り。それを食べた時の味は忘れない。

六．方言、唄、言い回し

・「おしまいやす」これは夕暮時の挨拶「仕事を終わりましょう」という意味の挨拶。
・「ほっこりした」は今、TVなどで言われている意味と異なり、仕事で疲れた様子を表す言葉として使われている。

七．当地における「キノコ」

①実物を知っている

・しめじ、黄しめじ、あぶらぼん
・松茸（出る場所を知っている人は松茸の巣といって、人には明かさない）

②食べたことがあるもの

・しめじ、黄しめじ、あぶらぼん

③自分が採ったことがあるもの

・黄しめじ、あぶらぼん

④「あぶらぼん」と聞いて思い出すこと

・学校から帰るとすぐ篭を持って裏山へ行き「あぶらぼん」を採りに行った。傘の開いた物より開いていない方が、お汁の具としておいしかった。

八．守山地区の一年のくらしの中の行事

・一月十五日　どんど焼き。お餅を焼いたり、書き初めを燃やしたり。
・三月十日　金比羅例祭。こんぴらさんに参り、お饅頭やセルロイドの飾りのついた飾り物をもらうのが楽しみだった。
・五月五日　五箇祭。木戸、守山、北船路、荒川、大物の五集落が集まって、樹下神社や下の御旅所で行われる。
・六月　虫送り。早苗につく害虫を追いはらう行事（前述）。
・九月一日　二百十日。氏神である若宮神社でお百燈を上げ、盆踊りを行う。

九．その他

・「守山石」は、庭園をかざる石として県内だけでなく、京都の方でも知られており、庭石を山から出してきて、浜辺におろし、船で各地へ売りさばく、それを生業とする家が数軒あった。浜に出した庭石には、それぞれの庭石屋の印が墨汁で書かれていた。

■七十九歳　女性
守山地区におよそ五十五年間住んでいます。

一．目に浮かぶ風景

・昭和四十一年頃、江若鉄道で浜大津まで通勤していたが、帰りの列車から見える景色がとても

美しかった（田んぼ～湖岸～琵琶湖～対岸の山～空と遮るものなしで）。
・下水道ができるまで、お風呂は薪で沸かしてたので、山に行って木を切って運んでたが、熊も猿にも出逢わなかったので、山仕事は楽しかった。

二. 耳に残る音
・琵琶湖で捕れた魚を売りに来た人の声　〝ごりいりまへんか～〟

三. なつかしい匂い
・稲を刈り取った後の田んぼで、枯れ草を燃やす煙の匂い。

四. 手足によみがえる感触
・冬、脱水機能がなかった頃、干した洗濯物がすぐそのまま凍ったこと。

五. 思い出の味
・お寺の行事で料理上手な姉さんが作られた小豆と小いもの〝いとこ煮〟。

六. 方言、唄、言い回し
・自分より年上の女の人を、おばさんと言わずに〝ねえさん〟又は名前で呼びかけること。やさしい雰囲気が感じられる。
・夕方、畑仕事などが終わって家への帰り道、出逢った人に〝おしまいやす〟と声を掛けた。
・おあがりやす。にいさん。

七. 当地における「キノコ」
①実物を知っている
・あぶらぼん
・こむそう（こもそう?）（白く深いあみがさのような形）
②食べたことがあるもの
・あぶらぼん、こむそう
③自分が採ったことがあるもの
・あぶらぼん、こむそう
④「あぶらぼん」と聞いて思い出すこと
・村はずれから少し入ったところにいっぱい生えてて、茶色で表面がヌルッとした感じで、みそ汁に入れたらおいしかった。

九. その他
・山へたきぎ用の木を切りに行ったり、川の水を使ってカレーを作って食べたこと。ふきやわらびを採りに行ったこと。遠い昔の楽しい思い出（昭和五十五年頃?）。

■七十七歳　男性
守山地区に　七十七年間住んでいます。

一. 目に浮かぶ風景
・この地区も麦わら葺きの屋根が多かったので、中学生の頃から高いところは平気だったのでよく手伝いに行きました。

二. 耳に残る音
・家の裏は川が流れているので年中水音を聞いて育ったので、台風の時などは水を止めるので少し淋しく思いました。
・風呂のまきのパチパチという音も懐かしいです。

三. なつかしい匂い
・小学一年頃は我が家でもおくどさんでご飯を炊いていたので、その匂いで起きていました。

四. 手足によみがえる感触
・冬は小学校に行く国道も腰まで雪が有り、消防署（団）の人達に雪かきをしてもらいました。
・夏は学校帰りに小川でハスという魚を採ったりしながら帰りました。

六. 方言、唄、言い回し
・相手に対して貴方達と言うのを『わんらは』と大じいさん達が使っていました。

七. 当地における「キノコ」
①実物を知っている
・しめじ、松たけ、ましめじ、白しめじ、ねずみしめじ
②食べたことがあるもの
・上記全部
③自分が採ったことがあるもの
・上記全部
④「あぶらぼん」と聞いて思い出すこと
・みそ汁をよく食べました。

八. 守山地区の一年のくらしの中の行事
・あたん講。正月、五月、九月。（神様用の御膳を作り、精進料理を供えて、当番制の順に各家でおまつりをする）御膳は順番に次の家へ回してゆく。

■六十九歳　男性
守山地区におよそ三十五年間住んでいます。

一. 目に浮かぶ風景
・小屋の横に外トイレと柿の木（あまい、小さい実）が有りましたが、私の車を入れるガレージになりました。

二. 耳に残る音
・祭での歌声と鉄棒引の音

三. なつかしい匂い
・ゴリを煮る甘からい匂い

四. 手足によみがえる感触
・雪かきの重さ
・夏、家を通る風のすずしさ

五．思い出の味
・かしわのすき焼き
七．当地における「キノコ」
④「あぶらぼん」と聞いて思い出すこと
・妻が子供のころよく食べたといっていた
八．守山地区の一年のくらしの中の行事
・八月ころに家の畳をすべて上げ1weekおいていた。父が亡くなってやめた。

■六十八歳　男性
守山地区におよそ八年間住んでいます。
一．目に浮かぶ風景
・家の周り、田畑の周りに敷き積まれている石積に当地の歴史を感じました。
七．当地における「キノコ」
④「あぶらぼん」と聞いて思い出すこと
・「あぶらぼん」という言葉は初めて聞きました。

■六十七歳　男性
守山地区に　六十七年間住んでいます。
一．目に浮かぶ風景
・牛を使っての農作業。春（田植え迄の作業）・秋（稲運び）。
・結婚式、披露宴、全て家で。S40年位迄？
・江若鉄道。～S49年
・守山公民館は、旧木戸小学校八屋戸分校（一～二年、守山、北、南船路の・・　S35年位？）
・農家は牛、にわとり、やぎ、ぶたを飼っていた。～S33年頃
・秋、もみの乾燥はむしろの上で日干しを。
・手植えの田植え（二～三軒共同で）
二．耳に残る音
・秋、脱穀機まわすため発動機の音。S35年位（ポン、ポン、ポン、）
・手動式（足踏み式）脱穀機の音（ガングリ、ガングリ、ガングリ）。S33年位
・江若鉄道の警笛（プォーン）～S49年
三．なつかしい匂い
・となりがおとうふ屋さんの為、豆腐→油あげにする臭い。S35年位？
・道に牛のふんが沢山。S30年代
四．手足によみがえる感触
・ハチの巣、かまって刺されたときの痛さ→治りかけのカユミ。
・地下水の湧いているところに素足をつけて、あまりの冷たさに痛くなった。
五．思い出の味
・小学生の時、野菜サラダにかけたマヨネーズの味
・小学生の時、チキンラーメンの味
・共同田植えの昼飯（田んぼで）。酢飯に紅しょうがが入ったバラ寿司
・家でつんだ茶、家で作ったお茶（ばん茶）、家で作ったうめぼし、紅しょうが、つけもの、ナス、キュウリ、スイカ（夏）、トマト、柿、いちじくetc
六．方言、唄、言い回し
・二百十日の盆踊りの中で「おどらんかぼちゃは、いんで寝され（おどらない人は帰って寝て下さい）」と音頭をとっておられた。
七．当地における「キノコ」
①実物を知っている
・マツタケ、アブラボン、シメジ、シイタケetc
②食べたことがあるもの
・マツタケ、アブラボン、シメジ、シイタケetc
③自分が採ったことがあるもの
・マツタケ、アブラボン、シメジ、シイタケetc
④「あぶらぼん」と聞いて思い出すこと
・開いている物より閉じている物の方が汁物に入れたときの味が
八．守山地区の一年のくらしの中の行事
・一月　山の神さんでどんど（氏子）
・一、五、九月　あたご講。上、中、下、浜講に分かれてる。中→お光（ローソク）毎日順番で（四ツ辻）当屋一～三日／毎月。順番でお酒でおもてなし＋α
・日待ち、山戻り、皆頭祈り。北の上当家、北の下、南の上、南の下。当家（当番）家、お茶、お菓子で。床の間にローソク、サカキ一対立てて。
・年末に「もち花」「鏡もち」を作って神棚に→カキモチにして後日素焼きにして食する。
九．その他
・お寺でのたく児所へ。～S33年
・春、秋、農閑期、お寺で共同炊事→各家、家族分もらって帰る。S35年位迄
・祖母から常々「ぼんよ、男は手に職（技術・資格）をもたなあかん」とよく言われました。→自動車業界へ→整備士や販売士、保険、溶接etc資格取得。
・父親の休みのとき無免許で、父親の車に…守山内を…。

■六十六歳　男性
守山地区に　六十六年間住んでいます。
一．目に浮かぶ風景
・くずやぶきの家
・天井裏のアオダイショウ（主（ぬし）だからさわってい

けない ↑ 母。時々でてくる→子供のころ）
・つばめ（家の?部をきりぬいて出入り）
・五月に春の道つくり（弁当持ちで）あり。その夜当家ですきやき+お酒をした。

二. 耳に残る音
・川の水の音
・水車（ギーギーギー、ガタンゴトン）。米を精米する時。ぬかは、ぬかづけ、肥料。
・ニワトリ（時々ヘビにやられる）→ 卵や肉として。小学生の時に離れるときにつらかった。すきやき、かしわ+家の野菜で炊く。

三. なつかしい匂い
・牛のにおい。ふん。
・雨の日にせきた（せった）をはいていった時、ふんも流れてきた。

四. 手足によみがえる感触
・雪がたくさんふって、ふみつけた。
・アユをつかんだ時の生ぐささ。
・父母のものをとったりした。

五. 思い出の味
・海の生もの
・茶園もある→茶つみ
・肉はにわとり、くじら。
・アユ、ゴリ、さんしょうとしょうゆで巻き寿司、さばずし。

六. 方言、唄、言い回し
・伊勢音頭（祭の時）

七. 当地における「キノコ」
①実物を知っている
・マツタケ、アブラボン
②食べたことがあるもの
・マツタケ、アブラボン
④「あぶらぼん」と聞いて思い出すこと
・マツタケ、アブラボンを父ととりに行ったけど、とれなかった。

八. 守山地区の一年のくらしの中の行事
・しじみが足でとれた。浜（島より南側）→入り江があり和舟が一～二そうとめてあった。松の木が一本たっていた（迂回する必要があった）。
・時代劇の撮影に使われた。

■六十四歳　男性
守山地区に　六十四年間住んでいます。

一. 目に浮かぶ風景
・家には、農耕用の牛がいた（S35ぐらいまで）。牛小屋は今は物置となっている。
・風呂の水は、バケツで池からくんできた。タキ木で風呂を沸かした。子どもの仕事だった（S33～34ごろまで）。
・「おくどさん」
・田植で田舟で苗を運んだ。
・江若鉄道で中学校二年まで通学した。乗り遅れたときは、線路を歩いていた（S45）。

二. 耳に残る音
・大型トラックが八屋戸橋の上を通るたびに、ゴトンガタンと大きな音が家の中までひびいた。（国道一六一号線）バイパスができ、少なくなった。

三. なつかしい匂い
・くわがた虫を採りに山に入ったとき、樹液のすえた匂いがした。
・稲を稲木からおろす時、乾燥した稲の匂いがした。

四. 手足によみがえる感触
・浜で水泳をした時、素足に石がやけて熱かったこと。水の中でも石ころがころころと足の裏に当たって痛かったこと。（この辺りは、砂浜でなく石ころだから）
・ムカデにさされ痛かった（ムカデ多い）。

五. 思い出の味
・干し柿、干し芋（自宅で作っていた）
・イタドリのすっぱさ
・エダマメと栗を一緒にゆでて食べた。

六. 方言、唄、言い回し
・「～しゃいやぁ」（しなさい）
・「伊香立方面の空が黒くなったら、雨が降る」…山の西南方向を見て天気予報。
・台風では、通過後の吹き返しがこわい！

■五十七歳　女性
守山地区におよそ三十年間住んでいます。

一. 目に浮かぶ風景
・裏の森の中で子供達が秘密基地をつくって遊んでいた（平成元年頃）。今は森の中に入る子供がいない。

二. 耳に残る音
・夜中にJR湖西線のアナウンスが聞こえる。
・夏は朝夕にひぐらしが鳴くのが天国のよう。

三. なつかしい匂い
・冬は近所のまきストーブの煙の匂いが朝外に出るとする。
・夕方に各家から漂ってくる煮物の匂い。
・早朝のまきストーブ煙の匂い。

四. 手足によみがえる感触
・草刈りの時の草の香りと暑さ。
・冬の下り坂のツルツル。雪の積もったところのキュッキュッという足の感触。

五. 思い出の味
・前日に炊いたのをおにぎりにしたんだけどと出してもらったおにぎりが、とても美味しかった。
・回覧板を持って行くと、ついてきた子供にお佛壇のおかしをおさがりでいただいていた。
六. 方言、唄、言い回し
・女性の既婚者に対し「ねーさん」と言う。
・他家を訪れるとき、ごめん下さいではなく「こんにちはー（＼／＿↗）」と声をかける。
七. 当地における「キノコ」
④「あぶらぼん」と聞いて思い出すこと
・やぶこぎで取り組んでいるが、ぜんぜん出ない。松の木がもっと増えないといけないのでは？

■四十九歳　女性
守山地区におよそ四十年間住んでいます。
一. 目に浮かぶ風景
・夏休みに湖西線の高架下に螢がたくさんいて見に行った。
・家がこんなに沢山建っていなくて、北船路まで行く道のりが雑木林だらけで恐かった。
二. 耳に残る音
・冬の朝に車のチェーンの音が聞こえたら、雪が沢山降っているのだとわかった。
三. なつかしい匂い
・赤潮の時のくさい臭い。
・下水がなかったので、どこの家もどっぽん便所だったので、汚水の臭いは普通にあった。
四. 手足によみがえる感触
・山に行った時に、沢ガニをつかまえた時の水の冷たさや、石をのける作業や沢ガニにはさまれた時の痛さなど。
五. 思い出の味
・わらびやつくしを、おばあちゃんと一緒に採って帰り、母に調理してもらい食べたこと。
七. 当地における「キノコ」
④「あぶらぼん」と聞いて思い出すこと
・言葉を聞いたことはありますが、食べた記憶はないです。

■二十一歳　男性
守山地区に　二十一年間住んでいます。
一. 目に浮かぶ風景
・竹ヤブ、廃テニスコート、廃屋を遊び場にした。多くはとり壊されたが、それは地域にとっては良い兆候なのだろう。
二. 耳に残る音
・駅の旧チャイム
三. なつかしい匂い
・牛フンの匂い
四. 手足によみがえる感触
・小川の冷たい心地良さ
・神輿の重さ
五. 思い出の味
・ゴリの煮付け
・ブラックバスの天プラ
・栗
・どこかの家のイチジク
・コアユ
六. 方言、唄、言い回し
・江州音頭
・祭礼の時の歌がかつてあったらしい

第五章　地域めぐるスタンプラリーと里山資源カード

五－一　概要

新型コロナウイルスによる社会情勢を受け、守山地区でも二〇二〇年四月から地域の主な活動が自粛された。五月三日に行われる五箇祭も二〇一九年度から神輿渡御を取り止める方針が出されて新たな榊祭りの形態を作り出す過程であったが、儀式はごく簡略化した式典のみが役員で行われた以外は中止された。二〇二一年も引き続き、地域の夏祭り、地蔵盆、運動会、老人会やお寺の催事、地域総出の農道整備や山道の確認などの行事など、地域の人々が顔を合わせる機会が制限されてきた中、少しでも皆が顔を合わせ、地域を知り、楽しむことができる企画として「守山スタンプラリーde抽選会」が実施された。実施する過程で自治会と足並みを揃えて、里山科研が準備・制作物を担うことになった。

五－二　「守山自治会」

守山自治会は、全戸二二四戸。そのうち、一九五〇年以前からの旧守山地区の戸数は五八戸となっており、その後昭和六十年代に地荒谷川を修復し周辺の荒地が宅地開発され、また、共有山を開拓し新興住宅地「風の丘」が設置された事により増加した新住民は一六六戸となる。（二〇一九年調査時）自治会長・副会長・会計三役。自治会・議会・公民館の運営を行う。自治会を二十九の「隣組」に分け、そ

れをA－Dの四ブロックに分ける。ブロック代表に選ばれた評議員は自治会が行う議会に出席する。新規住民が副会長を担うなど、新旧合同での自治運営が行われている。

五－三　「守山スタンプラリーde抽選会」

日時：二〇二一年十一月十四日（土）

主催：守山自治会

守山地区の旧集落に点在する自然・歴史・文化的な価値がある場所へ地域住人に訪れてもらい、旧住民・新住民が共に地域の魅力を体験・共感する場を創出することを目的に企画された。コースは三つ。受付である守山公民館でスタンプ台紙をもらい、「お散歩コース」（ポイント三箇所）、「入門コース」（ポイント五箇所）「覇者コース」（ポイント五箇所）から選んで、コースを巡る。それぞれの訪問ポイントには老人会の皆さんが待機し、クイズが出される。クイズに正解しスタンプを集める。コースを巡り終えたら受付に戻り、各コースの抽選に参加ができる。最終地点の守山公民館では参加賞として景品や「守山・里山資源カード」が配布された。

当日は晴天に恵まれ、子どもも大人も多くの住民が和気あいあいと参加した。複数のコースにチャレンジする人も多く、三つのコース全部（ポイント三箇所は二つのコースで重なっているためポイント十箇所）をコンプリートする子どもたちなどで夕刻の守山公民館はひとしきり沸き立った。（写真31～35）

写真32　地図を片手に子どもも大人も集落内のポイントを巡る

写真31　守山スタンプラリー受付、スタート！

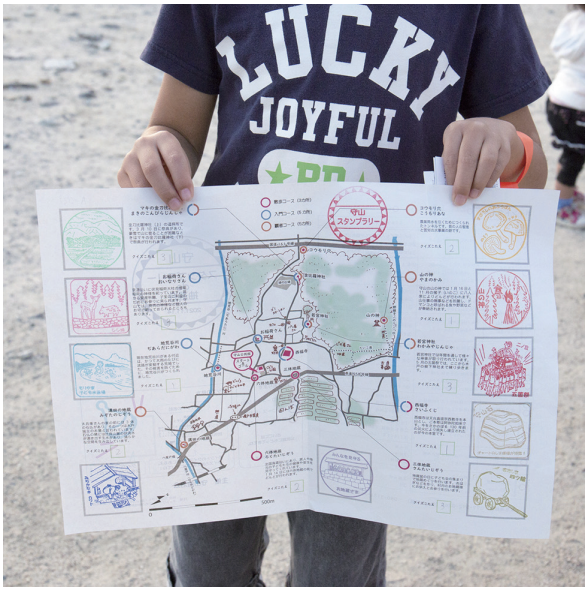

写真34　三つのコースを全部回ってコンプリート！

写真33　クイズに答えてスタンプを集める。手描きのイラストが好評

写真 35　賞品や守山・里山資源カードをもらえる

五－四　守山を歩いて・感じて・楽しむスタンプラリー

（一）スタンプラリーのポイント設定

まず初めにポイントの設定が必要だった。ポイントの選択には文献資料および実地調査を行ない、「道標・常夜灯コース」、「地蔵めぐりコース」「年中行事コース」「防災の歴史コース」「水をめぐる歴史コース」「新たな拠点コース」の六コース三十五箇所のポイントを提案した。自治会役員会にて「子どもや高齢者の行動や、二～三時間で巡ることができる範囲、県道五五八号線（旧国道一六一号線）をまたがない」という条件で巡ることができる十箇所にポイントをしぼり、最終決定された。

（二）ポイント解説文・クイズ作成

十箇所のポイントの解説文章は、文献資料や聞き取りから作成。クイズは、守山の自然と人との関わり、人々の暮らしを主題とした。お地蔵様の顔や姿を観察したり、道標の文字を推測したり、樹木をみて名前を考えるなど、現地で情報を得て、その場で経験を通して答えを導き出せる設問とした。監修は自治会役員会により行われた。

（三）デザイン制作

里山科研として、様々なデザインを担当した。地域の自然・歴史・文化的価値を伝えるための親しみやすさ、利用する年齢幅が小学生から高齢者と広いことに配慮したわかりやすいデザインとしてイラストを盛り込んだ地図やスタンプを制作した。「スタンプラリー台紙（地図）」「スタンプ」「守山・里山資源カード」のデザイン・編集は大原が担当した。

●スタンプラリー台紙（地図）

ベースの地図やデザイン、構成など、自治会役員会で何度も確認し、ブラッシュアップを行った。巡るコースがわかりやすいようにポイントの配置やデザインや色を工夫した。文字情報が子どもやお年寄りも読みやすいように、フォントやサイズ選びを行った。地図のベースデータに、地域の灯籠や柿やクヌギの巨木・お店などのイラストを挿入したことで地域の特徴を視覚的に伝え、温かみのあるデザインとなった。（図2）

●スタンプ（十個）

スタンプの題材は、守山の自然と人との暮らしと歴史・文化的景観を伝えるものとして、「守山石」「蓬莱山と棚田の風景」「琵琶湖（子ども水泳場）」「どんど」「五箇祭神輿」「六体地蔵様」「石出し車」「あぶらぼん」「カワト」「シシ垣」を選定し、手描きイラストで制作した。（図3）

●守山・里山資源カード

スタンプラリーの参加者が、この企画を通して訪れた場所との出会いを当日だけで終わらせることなく、情報を持ち帰り、家族に伝え、記憶に残していくことを目的に制作した。地域に残る伝承や歴史的記憶、自然と対峙して暮らし育んできたもの、世代を越えて引き継がれてきた信仰や行事、それらの時間が景観となってすぐ身近な日常の中に現存し、大切に守られ活用されていることを伝えていくカードとなった。写真撮影は永江が担当。単に説明図版ではなくその場所の魅力や歴史的背景が伝わる写真になるように意識して撮影した。体裁は、名刺サイズ、表面に「メイン画像」、裏面に「場所名、解説文、画像一～二枚、画像撮影日、画像撮影者」を記した。（図4）

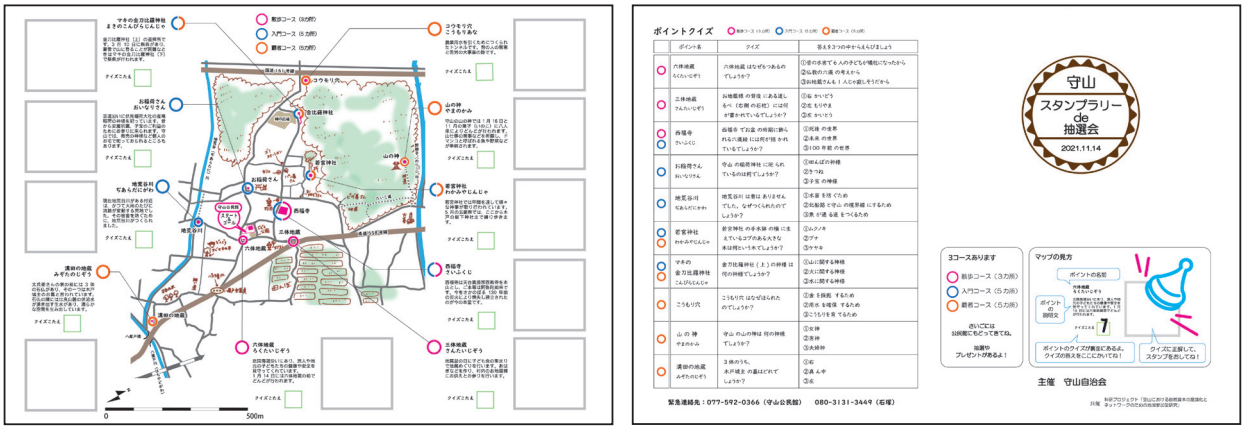

図 2　スタンプラリー台紙（ポイント解説、イラスト地図、地域の歴史・自然クイズを掲載）

図 3　守山の自然資源をテーマにしたスタンプ

図 4　守山・里山資源カード（一部）

第六章　比良山麓の石の文化サイクリングマップ

六－一　概要

本章は、「ＮＰＯ法人比良の里人」と里山科研が取り組む「比良山麓の石の文化サイクリングマップ」の制作について報告する。活動は現在進行中で、途中経過の報告となる。

六－二　「ＮＰＯ法人比良の里人」について

「ＮＰＯ法人比良の里人（以下、「比良の里人」という）」は二〇〇五年に設立され、三十～七十代の地元農家、造園業者、民宿経営者、移住した研究者や会社員など十数名の会員（女性は三割ほど）で構成される。比良山麓の豊かな里山の自然と景観を活かした新たな資源利用、管理、普及啓発などを目的とした活動を行ってきた。「比良の里山の魅力探訪」として地域の自然・歴史文化のある場所を歩く企画、伝統的な集落で使用される用水路を修復する「石積みの川復活プロジェクト」、旧志賀町の伝統と地域の魅力を次世代へ伝えるための活動「近江舞子の内湖活性化と環境学習」など、会員が自ら地域での体験を通して、里山の持つ潜在的価値を知り、「比良の持つ有形無形の様々な地域資源を活かす」ための活動が実施されてきた。公共事業のあり方や、文化的景観の保全・活用などに関して、会員の専門知識や技術を活かした活動を展開しており、行政や国内外の市民組織などとの交流もみられる[注6]。団体名には「比良の景観を愛し、その麓に暮らす〝里人〟として人と人のつながりを大切にしてゆきたい」という思いが込められている。（二〇二〇年度調査時会員数十二名）

六－三　比良山麓の石の文化

比良山系の東麓では標高一〇〇〇メートル程の山頂から急斜面が連続し、大小様々な河川が琵琶湖に流れ込んでいる。山麓に暮らす人々は、自然災害に対処するための様々な工夫を行ってきた。集落周辺の山や河川から産出される花崗岩やチャートなどの石材は、災害を防ぐための堤や水路、波除石のほか、シシ垣、棚田の石積みに利用されている[注7]。また、江戸時代から採石や加工が行われ、集落内には住宅の基礎石、道標、石灯籠などの様々な物に使われ、現在も地域を歩くと現存する。このような自然の脅威や恵みとの対峙をした「目に見える記録」として、比良山麓に現存する石の文化的景観とその暮らしを記録し、歴史やその技術を次世代に伝えていく活動が始まっている。

六－四　比良山麓の石の文化サイクリングマップ

比良山麓から産出される比良石を使用した様々な造形物がある町並みや風景、地域に伝わる技術、自然と向き合い共生してきた暮らしなどに出会うサイクリングマップを作成する。地元に自然・歴史・文化的価値のある造形物や風景があることを普及させることを目的に、地元の小学校や中学校をはじめ地域の活動での使用を想定。また、湖西でもインバウンド（訪日外国人旅行）の受け入れがコロナ禍に見舞われる前には盛んになってきていたので、そういった旅行者も視野に入れて琵琶湖を見渡す丘陵地など湖西を巡るコースとして提案することを考えている。

・マップの範囲：比良山麓の湖岸までの地域。ＪＲ湖西線北小松駅～和邇駅

・「山の辺コース」と「湖辺コース」の二コースのポイント選定

六－五　制作の経緯

・二〇一九年度：比良の里人により「比良の地域の織り成す石の文化」のポイントが選出され、比良山麓を通る「山の辺コース」と、内湖付近や湖岸を通る「湖辺コース」のコース作りが行われた。

・二〇二〇年、二〇二一年度：ポイントおよびコース確認、現地取材、石の文化研究者によるレクチャーなどを行った。また、比良の里人のメンバーで石工職人であるＨさんに、南小松の石材産業の歴史や石材の採掘、加工について聞き取り調査を行った。

コロナ禍で活動が制限・延期される中、現在継続中で取材や制作を進めている。比良の里人のメンバーの中には、守山地区在住で守山里山の会に参画している方もおられ、マップ制作が思うように進められない中でも様々な活動で顔を合わせお互いの状況を伝える機会があることが良好な関係性を保つことにつながっていると感じる。

写真 37　比良の里人の総会で提案した石の文化のスライドより「南小松」

写真 36　比良の里人の総会で提案した石の文化のスライドより「北小松」

写真 39　比良の里人の総会で提案した石の文化のスライドより「北比良」

写真 38　比良の里人の総会で提案した石の文化のスライドより「大物」

結び

大原は二〇一八年度から、永江は二〇一九年度から里山科研に関わり研究活動を進めてきた。本稿で報告したどのプログラムにも共通するのは、地域住民の方々と共に地域に顕在・内在する価値や課題を認識し、研究成果を共有するプログラムとして実施してきたことである。多くは地域が主体となって進めた企画に沿って研究活動を実施してきた。そのため研究期間が終了しても、それぞれの活動は地域住民によって継続して行われていくことになっている。

コロナ禍で地域の様々なイベントや外出・移動が自粛や延期を余儀なくされ、人と会って話をするというごく当たり前のことすら慎重にならざるを得ない社会情勢が二〇二〇年一月以降二年以上続いている。本研究も地域の実情などに合わせて活動内容を変更せざるを得ず、研究期間も一年延長された。そうした中でも、日々の暮らしや生業は状況に合わせて営まれ、人々のつながりもまた継続されてきた。もしかするとコロナ禍が終息した後、今この数年が地域や人の営みが大きく変化せざるを得ない転換点になるのかもしれない。そうした変化の中で、里山における価値感や地域のネットワークをよりよく、より発展的につなげていく一助として本研究の成果を地域に還元していければと願っている。

本研究を進めるにあたって、地域の多くの方々や協力団体のみなさまに多大なお力添え、ご協力をいただいた。深く感謝の意を表したい。

本調査報告書は、JSPS 科研費 JP18H0227（科学研究費助成事業（基盤研究（B））「里山における自然資本の意識化とネットワークのための地域参加型研究」）の助成を得て執筆しました。

註

1. 本研究の先行研究・研究への経緯として、里山の定義・位置付けとして、深町加津枝「里山研究の目指すもの 里山とは―その構造と地域性―」『森林科学』四十二巻　四－九頁　二〇〇四年　より引用。

2. 科学研究費助成事業（基盤研究（B））「里山における自然資本の意識化とネットワークのための地域参加型研究」：研究代表者：深町加津枝／京都大学：里山における「自然資本の意識化」と「ネットワークの創出」にむけた「地域参加型研究」を行い、地域社会にある里山の自然資本を自立的に再生、活用するための具体的な空間計画、地域デザインを検討することを目的とするものである。（二〇一八～二〇二一年度　社会情勢を受け一年繰越）
永江：二〇一九～二〇二一年度　研究分担者
大原：二〇一八年度　研究協力者、二〇一九年度　研究分担者、二〇二〇～二〇二一年度　京都大学大学院技術補佐として従事

3. 守山地区の変遷：明治七年（一八七四）五月－守山村と北船路村が合併し八屋戸村発足。その後、明治二十二年（一八八九）四月一日－町村制の施行により、南船路村・八屋戸村・木戸村・荒川村・大物村・南比良村の区域をもって木戸村発足。昭和三十年（一九五五）十月一日－和邇村・木戸村・小松村が合併して志賀町発足。平成十八年（二〇〇六）志賀町が大津市へ編入。

4. 対談　石塚定二郎×大岩剛一（近江学研究所客員研究員）「石出し車が行くみち―神々と暮らしが交差する風景―」文化誌『近江学』第九号　二十八－四十一頁　二〇一七年

5. 二〇二〇年十二月、石塚定二郎さんがお亡くなりになり大きな道標を失ったような気持ちになった。入退院を繰り返しながら、退院されては私たちに話をしてくださった。定二郎さんが残した貴重な民具・道具、書物、書き記した文章などについてご家族と相談させていただき、引き続き調査を継続することになったのは大変有難いことである。

6. 深町加津枝・奥 敬一「大津市比良山麓の自然資源利用と里山の暮らしの価値に関する考察」『景観生態学』二十一巻　第一号　三十三－四十一頁　二〇一六年　より引用

7. 総合地球環境学研究所 Eco-DRR プロジェクト『比良山麓石工鳥瞰図』二〇一九年　より引用

参考文献

・石塚定二郎『守山村の歴史』改訂版　十一頁　二〇一九年
・木戸小学校百周年記念委員会『木戸の里　歴史めぐり』一〇六頁　一九七四年
・落合知帆「水害対策に対する石の構造物と伝統知―滋賀県比良山系を事例として―」『日本都市計画学会都市計画報告集』第十八号　三九八－四〇一頁　二〇二〇年
・志賀町史編集委員会編『志賀町史』全五巻　一九九六年一月－二〇〇五年二月

下仰木の「十王堂」
―地域のお堂が果たす役割―

成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長
加藤　賢治

下仰木の「十王堂」
―地域のお堂が果たす役割―

成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長　加藤　賢治

Name:
Kenji　KATOH

Title:
"Juou-do" in Shimoogi: The Role Played by Local Temples

Summary:
In the Ogi district of Otsu City, there is a temple called "Juou-do" which enshrines the Ten Kings, judges who decide the fate of the dead based on their actions during their lifetimes. While unraveling the tradition of the Thirteen Buddhas (a belief peculiar to Japan that is accompanied by memorial services for the repose of the deceased) from that of the Ten Kings, we consider the significance and role of the temples and the community of people who gather there.

はじめに

新型コロナウイルス（COVID-19）の脅威がまだ冷めやらぬまま二〇二二年を迎えた。日本国内では、一旦落ち着いているかと思えた感染拡大も、ここに来て第六波の入り口に差し掛かったといわれ、海外では、オミクロン株やデルタ株が猛威を奮っている。死者が目の前に溢れるような惨状はありえないかもしれないが、コロナ以前のような行動は、控えなければならない状況が続いている。

百年前のスペインインフルエンザや、近世、近代初頭のコレラ、古代の天然痘などの感染症の蔓延は、日に日に死者が増加し、人口密集地ではまさに地獄の様相を呈していたといわれる。

一方で、現代の感染症は、医療の進歩によって、ワクチンの開発、量産などで過去に繰り返されたような惨状は免れているのかもしれないが、行動制限による経済活動の停滞が、特に社会的弱者にとって脅威となっている。すなわち、広く社会がつながっている成熟したグローバル資本主義経済社会においては、目に見えない新型ウイルスの存在が、先の見えないことへの不安、そこからわき起こる恐怖へと連鎖している。

近代以前には、感染症以外にも、戦乱や飢饉などが頻繁に起こり、不安定な世の中が続いたと想像されるが、民衆はどのように乗り越えてきたのであろうか。

その手がかりとなるお堂が、大津市仰木地区下仰木にある「十王堂」である。ここには、閻魔王を中心に中国から伝わったとされる十王思想に基づく「十王」の木像が並び、また、地獄が描かれた掛け軸（三幅）が所蔵されている。

本論では、この十王堂における民俗行事を検証することで、そこから見えてくる集落の暮らしを眺めつつ、厄難を乗り超えてきた知恵を探ってみたい。

写真１　下仰木十王堂外観

写真２　十王堂内部

第一章　下仰木「十王堂」

（一）下仰木「十王堂」と東光寺の歴史

大津市仰木地区下仰木にある「十王堂」は、大津市仰木七丁目二－一に位置する。県道三一三号線に面し、現在の仰木地区の東の入り口にあたる。

堂内には、正面にひときわ大きな閻魔王が鎮座し、その左右に秦広王、初江王、宋帝王、五官王、変成王、泰山王、平等王、都市王、五道転輪王のいわゆる十王が配置されている。加えてそこには、三途の川で亡者の衣服をはぎ取る奪衣婆と、亡者の罪状を読み上げ、判決文を記録する書記官である司録と司命が並んでいる。

以前、このお堂を見学した時には、地獄絵が描かれた掛け軸三幅が掲げられており、お盆の時期には、大勢の地域の人々がここを訪れ、閻魔王の前で、地獄絵の絵解きが行われていたという話を伺った。

今回、この十王堂の沿革を知るため、下仰木地区の檀那寺である霊雲山東光寺の住職である志井浩順氏を訪ねた。

志井住職によると、十王堂は確かに東光寺との深い関わりを持つが、開基については、その言い伝えも含めて、資料が残っていないとのことであった。現在の建物は、昭和五十二年に下仰木の住民有志によって建て替えられたということは確かで、古老の話によると、かつてのお堂は茅葺で、堂内は煤で真っ黒になっていたという。

明治期に記された仰木村誌には、東光寺の沿革が記されているので、それを参考にすることができる。十王堂の横に「無縫塔［註1］」と呼ばれる塔の頭の部分が丸くなっている僧侶の墓石が数個並んでいる。かつて、このお堂は、住職がいるお寺であった可能性もあるとのことであった。

仰木村誌によると、東光寺は、国宝の六道絵十五幅を所蔵する大津市比叡辻の聖衆来迎寺の末寺で、真玄上人の開基である。真玄上人は、文亀元年（一五〇一）に生まれ、永正十六年（一五一九）の秋に十九歳にして剃髪受戒し、大永七年（一五二七）の秋に来迎寺に入山。天文二十二年（一五五三）に寂すと伝えられている。そこから類推すると、東光寺は享禄年間（一五二八～）あるいは、天文年間（一五三二～）頃の草創ではないかと考えられる。

写真３　十王堂の地獄絵（三幅の掛軸）と獄卒・業秤・善悪人頭杖の木像　倉田成博氏撮影

東光寺は中世の草創であるが、開基である真玄上人以降、記録に残る範囲で盛祐、盛久、盛音、盛性、道覚、曳久、鎮舜、円照、寂忍、諦忍、理善、理定、理性、戒定、真栄、覚秀、恵順、圓定、そして現在の住職につながっている。特に、中興といわれる曳久の次々代の円照の時、延享二年（一七四五）に、台所普請として庫裡が建てられた。その次の住職である寂忍上人には、後述する「首切地蔵」の伝説が伝えられるなど、おそらく十八世紀の江戸時代中期頃から、東光寺をはじめ、十王堂の行事などが盛んに行われるようになったのではと推測される。

写真４　十王堂横の「無縫塔」と呼ばれる僧侶の墓石

（二）首切地蔵

現在、県道三一三号線に接する、東光寺の門前に「首切地蔵」と呼ばれる石仏が、東に向いて安置されている。十代目の住職である寂忍上人が発願されたということであるが、『ふるさと仰木－古老が語る－』の「首切地蔵［註2］」の項を見てみると、寂忍

写真５　東光寺門前の首切地蔵

上人の時代に、仰木と堅田を結ぶ旧道があり、仰木集落の村人が堅田で米を販売しての帰りに、その金品を狙って頻繁に追いはぎが出たという。文化元年（一八〇四）に寂忍上人が入寂された時、遺言として、追いはぎを改心させる、また仰木の村人の気持ちを和ませるためにも、地蔵さまを安置するようにと伝え残し、文化二年（一八〇五）に仰木から堅田へ向かう旧道に安置された[註3]。

その地蔵さまが、あるとき台風で、裏の天神川に落ちて首が離れてしまった。元の位置に一旦は戻し、首をその上に乗せた。その場に追いはぎが出ると、不思議なことにその首がどすんと下に落ちたという。追いはぎは驚いてその場を去ったので、その後に身代わり地蔵などと呼ばれるようになった。今では「首切地蔵」と呼ばれ、現在の位置に堅田方面を向いて佇んでいる。

写真６　かつて首切地蔵が安置されていた仰木から堅田へ抜ける旧道

伝説はそのように語られているが、地蔵石仏は、境界を守護するという信仰もあり、また、十王信仰の中の閻魔王と習合していることを考えると、仰木集落の東の入り口にあたる下仰木集落の位置と、閻魔王が主尊として安置される十王堂の存在との関連なども気になってくる。追いはぎや、悪党ばかりでなく、疫病の侵入も防いでいたのであろう。

次章では、十王信仰を中心に地獄の思想や地蔵尊についてもまとめてみたい。

写真７　今は使われていない湖西道路を渡る歩道橋。この橋を堅田方面に渡る手前（写真の右手）に首切地蔵が安置されていたという

写真８　仰木に通じる新しい道路と明治26年の改修記念碑。旧道はこの道路の設置以降、徐々に使われなくなっていった

第二章　十王信仰と十三仏信仰

（一）十王信仰

十王信仰は、中国で仏教と民間信仰である道教が混ざって起こり、唐の時代の半ばから後期にかけて成立したと考えられている。十王信仰は、仏教の伝説によると、道明という僧侶が冥界に入って「十王経」を感得したといわれ、『仏説預修十王生七経』に説かれている。道教では人が死を迎えると、冥界に存在する十殿と呼ばれる場所を巡っていくのである。十の殿にはそれぞれ「王」が居て、冥界に訪れた死者の生前に犯した罪を裁いていき、死者はそれを償っていくとされている。また、道教ではそれぞれの王に真君名を付けて身近な神の存在とした。

十殿に居る王は、それぞれ、

初七日・秦広王・太素妙広真君
二七日・初江王・陰徳定休真君
三七日・宋帝王・洞明普静真君
四七日・五官王・玄徳五霊真君
五七日・閻魔王・最勝輝霊真君
六七日・変成王・宝粛昭成真君
七七日・泰山王・玄徳妙成真君
百箇日・平等王・無上正度真君
一周忌・都市王・飛魔演慶真君
三回忌・五道転輪王・五化威霊真君[註4]

と呼ばれ、秦広王から泰山王までは、死後七日ごと

に殿を訪ねて王の裁きを受け、その後は、百日後、一年後、三年後という機会に殿を巡るのである。

このことが記される『仏説預修十王生七経』という仏教経典には「預修」という文字が見え、これは、この世に残された人々が追善のために供養するということではなく、本人が自分のために生前、予め（あらかじ）良い裁きになるように祈っておくということを意味している。概ね月に二回、十王に祈願することで十王の審判を免れることができたとされている。

このように、十王信仰は、中国の民間信仰である道教がその発端であることは間違いないが、この信仰が日本に入ってくると、日本の仏教と習合しつつ、より活発に民間信仰として発展していくことになる。

（二）日本における十三仏信仰

先述の『仏説預修十王生七経』が日本に入ってくると、鎌倉時代の始め頃から仏教的な展開が見られるようになる。具体的には『仏説地蔵菩薩発心因縁十王経』なる経典が書かれ、そこには十王にそれぞれ本地仏として仏の名前が加えられている。これがきっかけとして仏教の中で、十仏事としての追善供養が定着していくことになる。

初七日・秦広王・不動明王
二七日・初江王・釈迦如来
三七日・宋帝王・文殊菩薩
四七日・五官王・普賢菩薩
五七日・閻魔王・地蔵菩薩
六七日・変成王・弥勒菩薩
七七日・泰山王・薬師如来
百箇日・平等王・観音菩薩
一周忌・都市王・勢至菩薩
三回忌・五道転輪王・阿弥陀如来

そして、室町時代のはじめになると、十三仏事として展開される。「弘法大師逆修日記事」（『弘法大師全集』五）によると、逆修（自分のために生前、予め良い裁きになるように祈っておくということ）を行う日と関連づけて、阿閦如来（七回忌）、大日如来（十三回忌）、虚空蔵菩薩（三十三回忌）が追加されている。

「弘法大師逆修日記事」には、その題の通り、「預修」、「逆修」をする日を中心に十三仏事が示されているが、そもそも、逆修は回数や間隔は別として、平安貴族によって盛んに行われており、追善供養も行われていたことが知られている。十三仏を本尊とする追善供養が盛んになるのは、鎌倉時代の末から南北朝時代であると考えられ、室町期に至ってはかなり盛んになっていたことが、石造の十三仏等の遺物から想像することができる[註5]。さらに江戸時代には全国的に庶民に定着し、全国各地の寺院に十王堂や閻魔堂が現存しており、屋外には石仏の十王像が、十王堂内には木造の十王像が祀られている。

また、近年では、西国三十三観音霊場や四国八十八ヶ所の遍路、その他の観音巡りなどに準じて、昭和五十年代から平成十五年にかけて、全国二十箇所の十三仏霊場巡りが開創され、盛んに行われているという報告がある[註6]。

（三）日本における閻魔王と地獄と地蔵菩薩の信仰

日本における閻魔王、地獄、地蔵菩薩というと、浄土教思想と深いつながりがある。そのことについて『成安造形大学附属近江学研究所紀要』第七号「里山の民間信仰　―仰木の地蔵信仰について―」という論考で、筆者は仰木の地名の由来（横川の霊木を仰ぎ見る）となった比叡山延暦寺の北方「横川」の地において、慈恵大師良源（元三大師）（九一二～九八五）の高弟の一人である恵心僧都源信（九四二～一〇一七）が、浄土関係の仏説や諸論、経典から、地獄や極楽浄土に関する記事を拾い集め、『往生要集』を執筆し、「厭離穢土」「欣求浄土」を訴えたことに始まると述べている。

源信は、「六道（地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天）」という魂が転生するという六つの世界を解説し、特に「地獄」の記述に重点が注がれた。『倶舎論』に従って、等活、黒縄、衆合、叫喚、大叫喚、焦熱、大焦熱、阿鼻の八大地獄から書き始め、凄惨なる地獄の恐ろしさを文字で表現したのである。それが元となって、鎌倉時代以降、文字通り「六道絵」や「地獄絵」などの絵画として描かれるようになり、文字を読むことができない一般庶民にまでその恐ろしさが伝わった[註7]。

以後、室町期から江戸期になると、熊野比丘尼と呼ばれる勧進尼僧が、熊野観心十界曼荼羅[註8]を携

え、全国を行脚した。熊野観心十界曼荼羅には、六道の世界とともに、亡者が獄卒に様々な責め苦を受ける地獄の凄惨な場面が描かれている。亡者の生前の悪事は、浄玻璃鏡（じょうはりのかがみ）に写し出されそれを見て閻魔王が裁きを加えて六道の行き場が決定される。熊野比丘尼はこのような物語を「事実」であるかのように、臨場感のある絵解きを行ったのである。

十界曼荼羅の中に描かれるものの中で特筆すべきは、僧形の地蔵菩薩の姿である。地蔵菩薩は複数登場し、いずれも地獄に落ちた亡者を救う菩薩として描かれている。

源信の『往生要集』には、日常的に阿弥陀仏を熱心に拝んでいるものは、死後六道輪廻転生から逃れ、極楽浄土へ生まれ変わることができるとされている。都に暮らす貴族や武士階級、また商人などは、時間やお金をかけて、いわゆる作善を行うことができる。しかし、中世以降の百姓や職人、殺生を生業とする漁師などの民衆（庶民）は、生まれて亡くなるまでの年月に仏教に触れることができず、既に殺生など仏門にあってはならないことをしてしまっている前提がある。すなわち、仏教で必ず行わなければならない、経文を唱えることや、それを写すこと、仏像に向かって拝むことなどの作善をすることができない。これら庶民の心を救うには、地獄に一旦落ちても救ってくれる地蔵菩薩を独立させて信仰する必然性があったと考えることができる。

写真９　ミウラ折り熊野観心十界曼荼羅方丈堂出版。熊野比丘尼はこのように、一枚の曼荼羅を折って携行し、全国を歩いて布教した。

中世初期にはこのような仏教説話が、横川から下った浄土教家である僧侶たちによって語られ、近世以降は熊野比丘尼などの勧進僧が、地獄絵の絵解きを通じて、既に殺生をしている庶民の心を救い、作善に向かわせることをしながら、信仰を広め、勧進僧としての生業を続けたと想像できるのである［註8］。

第三章　十王堂に見られるコミュニティ―

（一）下仰木の十王堂に集まる人々

下仰木の十王堂には、地獄が描かれた掛け軸が三幅所蔵されている。現在は下仰木の自治会長が保管されており、年に一度、八月十六日の盆行事の時に堂内に掛けられる。

掛け軸は、表装も比較的新しく、絵画部分の剥落などもなく、内容がしっかりと見える状態であるので、江戸時代の後半か、明治以降に制作されたものかと思われる。今回、取材を受けていただいた東光寺の世話方である山村修三氏に話を伺った。

山村氏が子供の頃から、この十王堂は「じょうど」と呼ばれ、本当に近づくことができない恐ろしい場所であった。浄玻璃の鏡や、罪を秤る天秤棒、悪と善を見極める二つの顔の作りものなども、お盆には出され、掛け軸の前で、地獄に詳しいおじいさんやおばあさんの絵解きを聞いて震え上がったという。地獄の存在を信じて、行いを正す機会となっていたのは間違いないであろう。

「じょうど」と呼ばれていたのは、「十王堂＝じゅうおうどう」が省略され「じょうど」になったと思われるが、閻魔王と並んで極楽浄土の中心仏である金色の阿弥陀如来が安置されているので、「極楽浄土」を意味しているともいえるのかもしれない。

この十王堂を月に一回利用している集まり（コミュニティ）があるということで、令和四年（二〇二二）一月十六日に下仰木の観音講を取材した。

（二）下仰木の観音講

下仰木の観音講は、東光寺飛地境内の観音堂に祀られている千手観世音菩薩を信仰する講として古くからあり、現在は、比叡山延暦寺が主宰する叡山講福聚教会（えいざんこうふくじゅきょうかい）に所属している。

この叡山講福聚教会は、第二次大戦後、精神的にも経済的にも厳しい時代（昭和二十五年）に、精神の安寧と、真の信仰心を取り戻すために結成されたという。

さて、この観音講は、現在十三名の女性たちが所属。年齢は六十代から八十歳過ぎで構成されている。五年前までは、二十三名という人数だったが、観音

堂の秘仏千手観世音菩薩（国重要文化財）の中開帳（二〇一八年）を機会に高齢者が退会されたという。

活動は、毎月十日に、東光寺飛地境内の観音堂にて御詠歌を奉納することと、十六日に十王堂で同じく御詠歌を奉納することで、月に二回必ず集まって約二時間、お経を唱えることから始まり、三十三観音霊場の御詠歌を詠唱し、最後に回向・祈願で締めるという流れになっている。

二〇二二年一月十六日の観音講に参加されていた七名の講員に話を伺った。

「約五十年前に対岸の守山からここ下仰木に嫁いで来ました。先祖代々この十王堂を大切にされてきたことに驚いています。我々もいずれは死を迎えることになるのですが、観音講でお経をあげるなどしながら、仏様にあやかりたいと思っています。正直ありがたいことだと思い続けています。」

「私は下仰木の出身です。幼い時は、この『十王堂』のことを『じょうど』と呼んでいました。お盆になるとこのお堂に入るのですが、ここには閻魔さんがいて地獄の裁きをされ、またその地獄の絵が掛けられています。嘘をついたり、動物を殺したり、ものを盗ったりすると地獄に落ちると教えられました。本当に恐ろしい場所でした。こういう場所、行事は絶やすことなく残してほしいと思っています。」

「高島市の琵琶湖畔で生まれ育ち、この下仰木に嫁いできました。姑さん（義母）がこの観音講を紹介してくれました。観音講のメンバーと知り合いになることができ、早い段階で仲間ができました。感謝しています。」

「下仰木で生まれました。昔は、下仰木集落の人が亡くなると、お通夜を家で行っていました。そこに観音講の皆さんが来られて、ご詠歌を詠われます。今は葬儀場で行うのでその風習はほぼなくなりましたが、懐かしい思い出です。今の観音講は大切な集まりです。しっかり維持していきたいと思っています。」

「姑さんが観音講に入っておられました。当時は、講のお世話などがあり、かたわらで見ていて大変だなと思っていましたが、現在、観音講に参加させていただき、本当に嬉しく思っています。観音講では、月二回、ほぼ二時間にわたってご詠歌を大きな声で詠いあげます。これは健康にとっても本当に良いことだと思い、積極的に参加させていただいています。」

「雄琴の千野集落からここに来ました。当時の観音講は、人間関係の難しさなどもあり、参加するのはどうかと思ったりしていましたが、今では、仏様の前で純粋に拝むことの大切さを感じています。続けていきたいです。」

「仏事など何も知らなかったのですが、この観音講に入ってから、『お逮夜』の意味や、『初七日』や『四十九日』、『百箇日』などの追善供養の意味などを知ること、そしてその行事の大切さなどを知りました。お経も唱えることができるようになり、早くに家族を亡くしている私にとってはこの観音講の存在はなくてはならないものになっています。」

それぞれ講に対する思いを語っていただいた。

仏具、絵画などのモノや風習、教え（思想）など、仏教を中心とした古き良き日本文化に触れ、学びを得ることができる。自分が暮らす地域の人とのつながりを持つことができる。大きな声を出すことで、精神的、肉体的に健康になることができる。など、これからの世の中に必要だとされる要素をそこに感じることができた。

東光寺の志井住職にも同席いただいたので一言お話いただいた。

「現代は様々な楽しみがありますので、なかなかご詠歌を詠うことに興味を持っていただく方が少ないと思います。それでも、中にはこれか

写真10　観音講の様子

らご詠歌を詠いたいとおっしゃる方もおられ、そのような方には月に二回程度ですが練習会を東光寺でさせていただいています。ある程度詠うことができるようになれば、観音講に入っていただこうと思っています。」

と、これからも観音講を続けてほしいと願う大切な言葉をいただいた。

(三) 十王堂から見えてくるもの　今日の追善供養のあり方

さて、もう一度この「十王堂」という場所についての意義や役割について考えてみたい。

はじめに述べたように、十王堂は故人の魂の行末を願って十王の審判をより良いものにしようとするための追善供養と、十王を予め拝んでおいて、自分の未来に祈願する逆修という二つの仏事に関わる象徴的なお堂である。

この二つの仏事を現代において如何に考えるべきかが、現代の寺院における一つの大きな課題となっている。

僧侶で現代の宗教のあり方を研究する松崎慈恵は、著書の中で「少なくともこれまで数百年間、十三仏を本尊として追善供養を行ってきた伝統の意義を軽んずるわけにはいかないが、ただ単に今までどおり続けていけばよいのではなく、人びとがそれについてどう考えているか、あらためて現代においてその意義や役割を見直す必要があるのではないか」と語っている。十王経や源信の『往生要集』に語られた地獄の存在は、確かに十三仏信仰が定着し、広がった中世から近世にかけては、ほとんどの庶民が信じていたであろうし、十王や十三仏信仰に必然性があった。しかし、現代に生きる人々がどのくらい地獄の臨場感を持っているであろうか。十三仏について伝統的なことだけを説いても、法事（追善供養）をしてよかったということにならないであろう。

「日本人の国民性調査」（統計数理研究所、二〇〇八）の調査によると、「あの世」を信じるかという問いに対して「信じる」と答えた人は三十八％であった。「決して無い」「たぶん無いと思う」が四十四％であり、半数以上の人々は間違いなく追善供養の意義をそのまま理解することはできないであろう。

しかし、一方で、興味深い報告もある。日本社会において近代化、産業化が進み、社会システムの機能分化が深化すると、個人主義や核家族化などによって伝統的な風習や祭祀機能が衰えていくだろうと考えられていた。しかし、孝本貢の著書によると、先祖祭祀の風習について各種世論調査の結果、「年に一、二回程度は墓参りをしている」という比率が、一九七〇年から二〇〇八年にかけて六十％から七十％と安定し、微増しているというのである。

その理由としては、「家」という文化的価値から湧き出る先祖祭祀は、一部の社会条件の変化によって失われるようなものではなく、ある程度普遍的要素を持っていることや、祖父母、親兄弟など近しい物故者への「思慕」に基づく意識の変容、もう一つは、先祖祭祀を義務とするような新宗教の現れなどが挙げられる[註8]。

とはいうものの、やはり十王堂に見られる十王の裁きや十三仏によるいわゆる追善供養は、葬儀の日に初七日を合わせて行うことや、その次の供養は四十九日の忌明けまで省略されるのが一般的となっている。伝統的祭祀は残しつつも合理的に行われている事実があり、現在のコロナ禍が伝統的祭祀の省略に拍車をかけているようにも思う。

やはり、新しい時代にふさわしい追善供養のあり方や考え方を持たなければならない。

十王や十三仏信仰、すなわち追善供養は、日本特有の祖霊信仰と仏教の輪廻転生が融合した考え方から生まれた祭祀であり、現代風にいえば死者の魂とつながる一つのコミュニケーションであるといえようか。だが、その祭祀の現場、すなわち寺院で法事が行われている場面を思い浮かべると、普段出会うことがあまり無い親戚縁者が集まっている。確かに、亡くなった人物の魂を弔っているのだが、その仏事が終われば、遠くから来てくれた親類をそのまま帰すわけにはいかないということで、場所を変えて会食が行われるのが通常であろう。会食では物故者を追慕する話から始まるが、あとは懐かしい話や楽しい近況報告の時間になる。これはすなわち血縁でつながるコミュニティなのである。

ある一人の故人の一周忌が営まれた翌年は、違う親類の三回忌が営まれるなどし、年に数回その機会（法事）が訪れることもある。また法事ではなく葬

儀もあろう。血縁のコミュニティは、そういう場面で頻繁に形成されているのである。

核家族化が進むと、都市部に分散した遠くの親戚が集まる機会は、このような伝統的祭祀の場面でしかないといってもよいであろう。これは、先祖が残してくれた一つの知恵であるといえるかもしれない。

下仰木の十王堂に、ある特定の家の親戚縁者が集まるということはないかもしれないが、観音講など、この地域の人々、すなわち地縁で結ばれた人々がここに集う。その時に、十王と出会い、地獄の話があり、追善供養へとつながる。その法事という祭祀の現場では、血縁のコミュニティが形成される。

十王堂は、地縁と血縁というコミュニティの原点につながる大切な場所であるといえるのである。

おわりに（まとめにかえて）

現代社会には「無縁社会」という言葉がある。

近代合理主義が成熟した現代社会では、人とのつながりの煩わしさから逃れて生きることができる便利な社会となった。一方、近世の村社会は、全く逆で、決して一人で生きることはできなかった。農作業などの生業も、衣食住全てにおいて常に集団で行わなければならなかった。そのために、その集団をうまくつなぐための手段として、祭礼や講などが民間信仰の一部として必然的に行われてきた。十三仏信仰に見られる追善供養もそういう意味では、必要であったのだ。

近代社会を迎えると、社会システムにおいて機能分化が進み、都市部においては、全く個人で生活することが可能となり、村社会のしがらみから逃れることができた。人々はそれを自由で、解放されたと考えるようになったのだ。

それが、現代では「無縁社会」と呼ばれ一つの社会問題となっている。孤独死の定義は難しくその統計がとりにくいというが、年間の孤独死の数は三万人を超えているという。数字だけみても、「無縁社会」の到来を感じずにはいられない。

祭りなどに代表される伝統的な行事などは、その地域が持つ固有の大切な文化である。今回取材をした「十王堂」には貴重な地域文化が詰まっている。追善供養や観音講などを受け継ぐことで、地縁や血縁のコミュニティが維持されることになる。すなわち、「無縁社会」という社会問題を解決する一つの糸口であるといえる。現在は新型コロナウイルスの蔓延により、地域の人々が集まりにくい状況が続いているが、かつては、神仏にすがりながら、感染への不安を和らげ、孤独を乗り越え助け合ってきたのではないかと考えられる。

十王堂に内包される文化財、行事は地域の人々をつなぐ大切な役割を持ち、ゆえに今後も大切に守っていかねばならないのである。

最後になりましたが、この取材にご協力いただきました下仰木観音講の皆さん。そして、取材に同行いただいた東光寺住職の志井浩順様、東光寺世話方の山村修三様にこの紙面をお借りして厚く御礼申しあげます。

註

1. 瀬川欣一「無縫塔」『近江　石の文化財』サンライズ出版　二〇〇一年
2. 深田亮三「首切地蔵」『ふるさと仰木　－古老が語る－』仰木史跡会編集・発行　一九九四年
3. 首切り地蔵が安置されていたという場所は、旧道を東に下り、現在の湖西道路を越える歩道橋の手前であったという。その旧道は、明治二十六年に当時の仰木村の玉井縫右衛門村長と北村見吉助役の尽力によって現在の仰木に通じる道が整備されたことによって使われなくなり、現在は全く使用されていない。
4. 田中文雄「中国の死後世界と十王信仰」『十三仏の世界―追善供養の歴史・思想・文化』ノンブル社　二〇一二年
5. 児玉義隆「十三仏石造資料の梵字」『十三仏の世界－追善供養の歴史・思想・文化』ノンブル社　二〇一二年
6. 渡会瑞顕「十三信仰とは」『十三仏の世界－追善供養の歴史・思想・文化』ノンブル社　二〇一二年
7. 加藤賢治「里山の民間信仰　―仰木の地蔵信仰について―」『成安造形大学附属近江学研究所研究紀要』第七号　二〇一八年
8. 泉 武夫・加須屋誠・山本聡美編著　金井杜道撮影『国宝六道絵』中央公論美術出版　二〇〇七年
熊野観心十界曼荼羅は、室町時代末期から江戸時代にかけて各地で活動した熊野比丘尼が携行し、絵解きをしたといわれている絵画である。地獄極楽図とも呼ばれ、平安時代・鎌倉時代に盛んに描かれた地獄図や極楽図に加えて六道絵の系譜から天上・人間・修羅・餓

鬼・畜生・地獄の六道に、仏・菩薩・声聞・縁覚の四聖界を併せて十の世界が描かれている。人の一生と死後の世界についての考え方が臨場感を持って象徴的に描かれ、当時の人々の死生観を醸成した。

9. 小栗栖健治『地獄絵の世界』河出書房新社　二〇一三年

10. 松崎慈恵「現代日本社会における十三仏と追善供養－功利主義的考察－」『十三仏の世界－追善供養の歴史・思想・文化』ノンブル社　二〇一二年

近江の懐をめぐる 5

美術家／成安造形大学准教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員
石川　亮

近江の懐をめぐる 5

美術家／成安造形大学准教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員　石川　亮

Name:

Ryo　ISHIKAWA

Title:

Omi's "Futokoro" : Part Five

Summary:

Using a survey of an area in Shiga called Shukubamachi I will examine topics such as "techniques" and their "spirit" in order to answer the questions, "Why have these particular techniques been preserved and passed down?" and "What special value were they perceived to encompass?" I will also look at why these examples are so limited.

「近江の懐」とは、近江（滋賀県）という風土に根を下ろして未来社会へ向けてものづくりや新たなライフスタイルや伝統の継承などを実践し発信している人々と、それらを育む近江ならではの風土や地域社会のつながりの場である。「命の水の周辺にある暮らしの中に活きづく生業」そしてその「クオリティの高い手技や精神」に焦点を当て、主に近江の主要な街道沿いにある宿場町や門前町などを訪れ、その場で起こる独特の魅力を見つけ出すことを心がけている。

二〇一六年十二月よりびわ湖芸術文化財団（二〇一七年三月までは滋賀県文化振興事業団）が発行する「湖国と文化」に〝近江の懐〟と題して近江の街道、宿場町におけるものづくりやそこで育まれた精神性、次世代につなげる新たなる価値を写真と文で紹介する機会をあたえられた。二〇二二年一月現在まで十九回の連載が継続されており、本稿では二〇二一年一月より二〇二一年十月までの第十六回から第十九回までのオリジナル文を可能な限り残し、近江学研究所紀要として再編集した。

はじめに

五回目となる「近江の懐をめぐる」は新型コロナウイルス感染症の感染拡大を繰り返す中、外出時はマスク装着が日常となる。そこで感染対策を試みながら活動する工夫として、ロードバイクに乗りフィールドワークする可能性を広げた。二〇二〇年の暮れ、自宅から近い、冬の北国海道（西近江路）、和邇（わに）・榎（えのき）の宿（しゅく）のライド取材から始まる。筆者がこの文書をまとめる二〇二二年一月時点で、第六波と呼ばれる感染拡大が急速な勢いで襲いかかっている。「いつまでコロナウイルスとの共生が続くのか」「おそらく当分の間は続くだろう」この自問自答を繰り返す二〇二一年であったと振り返る。特に医療従事者、介護、福祉などのソーシャルワーカーと呼ばれる人々は、一度感染拡大になれば過酷な労働状況になる。そして飲食や観光など直接的な対面での「なりわい」は、感染対策と活動継続のジレンマに悩まされる時間が続いている。そんな中、地域における暮らしを持続しつつ、日々の工夫を続けながら、コロナと共存しつつ工夫の姿勢で「なりわい」に向き合う人々に焦点を絞った。始めは、大津と白髭神社の中間地点に位置する和邇で、自宅を鞄製造販売の場にしながら、平日は近隣農家の作業を手伝い、土

日をお客さんとつくるオリジナル鞄で独自の世界観を構築するクラフトマンのライフスタイルに注目した。次に茶所で知られる甲賀朝宮にて、古くからの交通の要衝、今日ではサイクルロードの通過点に位置する場所に工房を構える、自転車のフレームビルダーを訪問した。また、湖北、賤ヶ岳山麓に位置する大音の古民家カフェを営むオーナーは、移住後、農村の丁寧な暮らしを実践することで、地域の食文化を伝えている。さらに出版社を立ち上げて発信する活動を続け、地域の景観保全につなげていこうとしている。西浅井の黒山では、長浜市の地域おこし協力隊に採用されたことをきっかけに移住し、自伐型林業を馬搬（ばはん）という伝統的な方法で取り組む挑戦をしている。自身が望む暮らしを地域おこしや環境保全活動につなげようとする活動家に出会った。

彼らに共通するのは人里離れた長閑な風景が広がり、幹線道路から少し外れたところに、生業の場がある。変化の激しい時代を感じつつも、地に足をつけた独自の生き方、暮らし方の実践を試みている。自転車でのアプローチでなければ出会えなかった場所に拠点を構え、コロナ禍で生活スタイルを大きく見直さざるを得なくなった現在、四者の生き方を受け入れる「近江の懐」を紹介したい。

一、和邇の道標カバン

コロナ禍になって生活の一つとなったことがある。それは二〇一七年から少しずつ始めていたロードバイクに乗って琵琶湖周辺を走ることだ。人との接触をなるべく避けながら行動せざるを得なくなった今、体力を維持し自身の免疫力を高め、さらに体調コントロールを心がけるにはうってつけだ。毎日数分でも数キロでもロードバイクに跨がり走ることは私を解放の道へと導いてくれている。

二〇二〇年から二〇二一年にかけて全世界でコロナ第三波がやってきた。日本国内でも首都圏を中心に日増しに感染者数の記録を更新する状況である。そんな中、自身のニューノーマルを模索しつつ出来る限りの近場、足元に目を向け、重心を置き、少しずつ動き出すことにした。

北国海道（西近江路）を北上し、和邇中に入ると京都へ向かう龍華道と合流する地点で榎石標を改めて確認する。そのまま直進、和邇小学校を過ぎると高城地区に入ってくる。二股に分岐する左方向へ、旧街道の面影をなんとなく感じながら進むと左手に、木々に囲まれた独特の世界観を放つ、昭和の住宅が目に入ってきた。表側の古びたトタン製の倉庫が新たな風情を醸し出し、よく見るとカバンの形をしたアイコンと「ＢＡＧ」と書かれた看板が掲げられていることに気づく。その向こうには煙突が見え思わず足を止めた。周りを見渡すと薪がたくさん積んである。別の入り口からそっと覗くと庭仕事をしている男性と目があった。実は事前に連絡を取っていた「カバンのキャラバン」店主の加藤厚士さんである。

加藤さんとは数年前、浜大津でお会いしたことがある。京阪電車石坂線が走る道路沿いの小さなビルの二階に店を構えておられた。鉄製のガラス窓から光が差し込むショップ兼仕事場には観葉植物、多肉植物が所々に並んでいる。そこで布製オリジナルカバンを製作販売されていた。多彩な図柄、素材の布ロールと白地キャンバスとなめし革でつくられた様々なパターンのカバンが並んでいたことを記憶している。

庭先で加藤さんと話しながら新たなショップ兼仕事場に案内していただくと、以前見た世界観が直ぐによみがえってきた。昭和の住宅、内装をリノベーションし白色に塗られた壁面に観葉植物が所々展示されている。その合間に手製の什器が配置されオリジナル布製カバンが並んでいる。思わず私は商品のショルダーバッグを肩にかけ鏡の前に立ってみる。店内をうろうろしつつ、煙突の正体である暖炉の前に座らせてもらいお話を伺わせていただいた。

この場所を仕事場にしたのは二〇一五年からで、実はここが高校生まで住んでいた生家であるとのこと、高校卒業後、関西の芸大で陶芸を学ぶが、しばらくしてカバン製造に関心が向き大津で袋物販売製造の会社に就職する。そこで製造技術から営業、卸、製品管理など様々なスキルを身につけるが当時の経済効率優先のものづくり社会、その仕組みに疑問を

感じていたそうだ。二〇〇〇年に独立、最初は大津中央に店を構え、自身の作りたい定番（既製品）を製作販売することから始まる。しかし近所のお客さんからの注文に、「この形で、この色で！」「もう少し小さく！」など「融通を利かせてつくるものづくり」が楽しくなってくる。二〇〇七年からは浜大津に店を移し、現在も続くセミオーダーのカバンづくりになっていったそうだ。予め何種類かのカバンを作っておき、そこに好きな布地、素材、図柄を当て込み、持ち手のなめし革部分の形、色をカスタマイズしていく。そうやってお客さんと対話しながら唯一無二のカバンづくりが展開される。「お客さんがデザインしたものを僕がつくる！」と加藤さんは語る。カバンづくりがわかってくると素材の特性や機械の調整、様々な計算ができる様になり、新しく斬新なものにチャレンジしにくくなってくるが、そこで新鮮な感覚を大事に、お客さんの拘りを聞き出して唯一無二の作品をつくることが楽しいのだ。そして更にカバンへの愛着や思いが深まるのである。次に「滋賀（近江）」でつくることの意味や拘りはあるか？　という質問を敢えてしてみた。すると一息置いて「私は滋賀というよりも日本製であることが大事かなって思っています。」と、日本には様々な伝統技術が各所で残っており、そこの職人たちとのつながりがあればシャトル織機でつくった生地を適正な価格帯でお客さんに提供できる（加藤さんは岡山児島の職人さんと連携がある）。昨今、地域ブランドも面白い試みであるがここでは丁寧なものづくりと国内、近場で連携し合うものづくり、そして作り手のパーソナリティーが大事な様に感じた。

実際に「カバンのキャラバン」でオリジナルカバンを作るとなると形と布地選びで必ず一回はお店に行くことになる（受取りにもう一回或いは郵送？）。今日のネット販売時代では、よりたくさんの画像で情報提供がなされ、購入者からの評価、レビューがついてくる。それを見て、読んで購入への判断をする。もしかすると自分で生地や図柄を見て触って選んだり拘ったりできず、自分の感覚や好みがもはや分からない、他人の評価を気にする時代なのかもしれない。しかしここにはもう一度自分で考え、楽しむことに気づかせてくれる何かがある様に思えた。「理想はお客さんが勝手に作ることができれば本当に楽しいですね！」と。

お店は金土日に開店、平日は高島市の農家さんの手伝いなどされている。庭仕事や暖炉の薪の調達、農家さんとの連携、そして価値を共有する全国のものづくりに携わる職人同士のつながりなど、ネット社会の情報に振り回されない職住一体の暮らしがみえた。取材後、店に入って直ぐに手にしたショルダーバッグを再度手に取った。加藤さんの選ぶ素材と色の組合せは、そうは言っても絶妙である。ショルダーバッグは自身のコレクションとなって店を後にした。「キャラバン」の名は行商、隊商のイメージから着想されており、近江商人の有り様そのものと感じた。

帰り道、来た道を戻って二十メートル程のところに常夜灯と道標を発見した。うっすら文字は見えるが読むことはできない。後日、調べると「北国海道大津江五里 白髭江五里」と刻まれ、北国海道（西近江路）であり大津と白髭神社の中間点であると、また片方には「比良山観世音」と刻まれ、天台真盛宗報恩寺がこの先の丘上に位置し、恵心僧都作とされる木造十一面観音像を安置していると『近江の道標 歴史街道の証人』（木村至宏著）では書かれている。さらにびわ湖鉄道歴史研究会の江若鉄道廃線跡地図によると旧江若鉄道和邇駅が「カバンのキャラバン」の直ぐ前あたりに位置していたことも確認できた。ちょうどこのあたりから湖の方へと北国海道（上街道）が曲がり大将軍神社を過ぎたあたりの出口の十字路で湖岸を走ってきた下街道と合流する。

後日、もう一度加藤さんにお会いして尋ねるとやはり間違いない。以前はお店より北側は道が無く、ここから湖岸の方へ道が曲がり、家の前が駅舎であったことを伝え聞いておられた。

昭和の高度成長期に建てられた実家を受け継ぎ、新たなものづくりのあり方とライフスタイルを模索される加藤さんの姿はサステナブルで創造性に満ちている様に感じる。この場所が近江の交通インフラの変遷と潜在能力を伝えていること、それは単なる偶然とは思えない。

写真1　左側の旧道（北国海道）へ

写真2　カバンのキャラバン玄関より

写真3　カバンのキャラバン「BAG」の看板が見える

写真4　プロトタイプのカバンが数種類並んでいる

写真5　店主の加藤厚士さん

写真6　布地のサンプル

写真7　制作プロセスが案内されている

写真8　ショップ内の様子

写真9　北国海道を刻む石造道標

写真10　和邇高城にある道標と常夜灯

二、朝宮（あさみや）の自転車

すっかり自転車に乗る生活が定着してきた。一日に一時間から二時間程度、週に二、三回は通勤以外でトレーニングと気分転換を含んだライドに出かけている。自宅近くの仰木から大津方面へ山沿いを走り西教寺、日吉大社前を通過して蕎麦屋前を曲がって作り道（名前の由来は諸説あり）へ、盛安寺前を抜けて唐崎方面へ出る。湖岸沿いの北国海道（西近江路）を北上して新唐崎公園で琵琶湖を見ながら一休みし、再び街道へ、おごと温泉街を通り抜け仰木へ戻ってくるコースだ。これが私のビワイチ・プラスである。

二〇一九年十一月に国土交通省がナショナルサイクルルートに選定した琵琶湖岸を一周する約二〇〇キロメートルの道「ビワイチ」がある。また滋賀県がビワイチにプラスして県内の街道や峠道を通りその魅力を伝えるルートを設定し日々更新し続けている「ビワイチ・プラス」があることを確認しておきたい。

朝宮と聞けばすぐに茶のイメージがわく。ここにもビワイチ・プラスが存在する。ビワイチのスタート地点である瀬田の唐橋から国道四二二号線を南下、石山寺、瀬田川洗堰、大石を過ぎ山間部に入って朝宮へ、茶畑を左右に見ながら信楽へと向かうルートだ。朝宮に入ってすぐのところに枚方、京田辺とつながる国道三〇七号線との三叉路がある。そこから信楽方面へ三〇〇メートル行ったところに「m（マ）acch（ッ）i（キ）」と書かれたクールな建築を発見した。窓からはロードバイクが少し見えている。ここは古くから大阪、奈良へ、東へは東海道、伊勢へとつながる交通の要衝であることは言うまでもないが、ここに立ち上がった新たな場に焦点を当てたい。

この道は常々車で通る道だが、いつ開店したのか気になり早速「マッキサイクルズ」に連絡を取ると、店主の植田（うえだ）真貴（まき）さんは快く取材を引き受けてくださった。二〇一九年自然豊かで自転車が比較的行き

交うこの地をたまたま発見して仕事場を立ち上げたそうだ。それまでは生家の愛知川町近くでハンドメイドフレームビルダーをスタートされたとのこと。つまりロードバイクの伝統的な素材であるパイプ状のクロモリ（クロームとモリブデンの合金）を溶接加工して自転車のフレームをつくる職人である。自転車は、当然ホイール（車輪）、ハンドル、ブレーキ、サドルなどを組み上げ完成車に仕上げるのであるが、フレームをハンドメイドする自転車屋さんはそういない。それは接合させる素材同士を熱でゆっくり温め、そこに溶棒をたらして溶接する繊細な技で経験がものを言う技術だからである。

私が中学生の頃、父親からロードバイクを買ってもらったことを思い出す。今もメーカーとお店は健在だが当時京都に安価で自転車をつくるメーカーがあった。自転車製造は、元々自転車レースが国の文化でもあるイタリア、フランスでの製造が伝統的だ。日本でも大手ブランドで生産は進んだが、やがてクロモリフレームの生産は東南アジアが中心となり溶接技術の精度の高さも彼らが中心となる。時代は進みアルミフレーム生産が主となり溶接もオートメーション化されていくと、マウンテンバイクなどの様々な展開が見られアメリカや台湾のブランドが次々にイノベーションを起こした。数年前からは軽さと剛性に優れたカーボン素材を扱うことが主流となり健康ブームもあってか比較的需要が伸び、かつての名ブランドが次々と新モデルを出して新たなカルチャーを開いている。一方、かつての主流であるクロモリフレームは重量否めないが独特のしなりがあり、細身のフレームはボリューム感のあるカーボンフレームに比べてスマートで、何よりも細部の仕上がりが美しく未だに人気が高い。このようなフレームは以前は大量生産しないと作れなかったが今日のグローバル、ネット社会が小ロットで細部の仕上がりに融通の利くものづくりを可能にしたと言えるだろう。植田さんがつくるフレームはまさにカーボンバイクの性能に劣らない今日まで技術継承されてきた日本製のフレームだ。

私もロードバイクに乗る生活を再開させてから数ヶ月経つが、スキルアップすると同時に自身の体力や調子に変化が出てくるのが乗っているとわかる。それは小さいことだがパーツの素材や性能の違い、サドルの位置など微調整しながら自転車が体の延長で一部になってくることがわかってくる。自動車やパソコン機器などには味わえない体と同調してパーツを組み替えようとする感覚は新鮮だ。

滋賀県で生まれ育った植田さんは休日に琵琶湖周辺を自転車で走ることやホビーレース（地域で開催されるイベント）に出るなどアルミやカーボン製の自転車に乗りつつ、漠然とサイクルショップの開業を思い描いていたそうだ。脱サラして三十代半ばで一念発起し、東京サイクルデザイン専門学校の開校を期に一期生として入学、在学中からフレームビルダーの元で修行を始める。卒業後、栗東の機械製造工場の一角を間借りしつつ自身の目指すフレーム製造の模索が始まった。その後、レースでも戦える「よく走るクロモリ」を目指し二〇一七年自宅近くのスペースから事業を立ち上げた。

様々なパターン、カラーのバリエーションが選択でき、誰でも簡単にフレームオーダーができる態勢を整えている。しかし乗り手に拘りや目的が明確でないとオーダーすることの意味がわからない。フレームをオーダーするということが自身の乗り方、目的、サイクルライフが何を意味しているか、或いはどんな生活スタイル、考え方なのかまでがつながって問われている。これは大量生産のカタログから選択する考え方と大きく違うビジネスであることが見えてくる。一人ひとりの生活、乗り方に合わせたものづくり、乗り手とのコミュニケーションがある様に思えてきた。

クロモリに軸足においてフレームのフォーク部分が振動吸収性の高いカーボン素材仕上げ、クロモリパイプとカーボンパイプを両方使い適材適所に使用するハイブリッド仕上げ、さらには乗り手の体格に合わせて大きさも変幻自在につくるなど、ハンドメイドビルダーでしかできないものづくりが展開されている。植田さんに言わせれば「新たな開発は素材の組み替え作業がしやすいクロモリバイクから始まる」とのこと、最近では滋賀県の観光や健康社会づくり推進につながる自転車を通したイベント講師を務めるなど、乗る楽しみを広げることもされている。

自身のウェブサイトには「ｍａｃｃｈｉとして日々模索を続けていくうちにたどり着いた一つの答え。それは常に乗り手、使い手として接してきた〝原

点〟を忘れない、ということ。乗り手と同じ価値観を共有し造り上げたフレームはｓｙｍｐａｔｈｙ（シンパシー）にあふれ、羽となり、そして進みはじめる。そんな想いからこぼれ出たｍａｃｃｈｉのラインナップ。しかしこれは、ほんの入り口でしかありません。その先に様々なプロセスを経てｓｙｍｐａｔｈｙという大輪が花開いたとき、はじめて誰かのための一台が産まれるのです。」と記されている。マッキサイクルズのフレームのヘッドにデザインされたＭの文字から生える羽は「羽ばたくように走ってほしい」という想いが込められている。

大手外国ブランドがトレンドをつくり、毎年完成車を発表する自転車業界がある一方で、琵琶湖を中心とする滋賀県に新たなカルチャーとして開花しつつある自転車を介したコミュニティと新しい生き方を提案しているように感じる。

後日、少し手前の三叉路まで自転車で出直し、県境の裏白峠を目指した。『近江の峠道―その歴史と文化』（木村至宏編著）の中で八杉淳氏は、都が京都に遷って以降伊勢への参詣路として用いられたとしている。早速現場へ向かうと国道三〇七号線脇に山間を縫うように旧道が続いている。林道を走る自転車好きには楽しすぎる道である。道の途中に茶畑を見ながら峠を堪能することができた。

日本の歴史が始まる頃より交通の要衝としてあるこの長閑な地で、自力で移動することの喜びと価値を伝える新たなステーションを近江の懐が支えている。

写真15　羽のマークの入り口から店内を覗く

写真13　長閑な風景にマッキサイクルズが見える

写真11　国道沿いの茶畑（茶摘みを待つ朝宮茶）

写真16　ジグに装着されたクロモリフレーム

写真14　窓から自転車がのぞく店舗

写真12　大津、信楽への三叉路（枚方方面から）

写真21　植田真貴さん制作のクロモリフレーム

写真19　店主の植田真貴さん

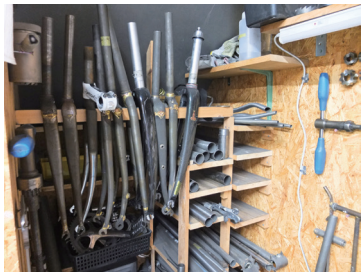
写真17　フロントフォークとクロモリパイプ

写真22　裏白峠を自転車で越える筆者

写真20　店主の植田真貴さん

写真18　ショップ内の様子

三、大音の茶店

長浜市木之本町大音は、瀬田の唐橋を起点とするビワイチにおいて、最深部と言って良いだろう。西野放水路沿いのさざなみ街道を北上して、国道三〇三号線との交差点を越えてすぐに北西方向に伸びる道がビワイチである。道に沿って目を向けると賤ヶ岳の山容が確認できる。

二〇二一年三月、ビワイチに挑戦した私は、春の強風にあおられ、手前の三〇三号を左折しそのまま新トンネルを抜け、飯浦に出てしまった。本来なら伊香具小学校を左に旋回し、ビワイチ唯一のヒルクライムと、賤ヶ嶽隧道を抜けて遠望できる竹生島を不覚にも抜かしてしまった。

二〇二一年夏、もう一度その場を確認したい思いで大音へ。そして二〇一八年に偶然見つけた喫茶店のことを思い出し、賤ヶ岳リフト乗り場から数メートル歩いたところの大屋根の古民家喫茶へと向かった。日当たりの良い南側に玄関があり、麻布暖簾に「丘峰」と記されている。その時は「古橋焼肉」を食した。それは特製のタレにつけられた鶏肉を炒めたものに、玉ねぎの酢漬けがついてくる料理だ。「ここから少し東の古橋で、五月頃に食される伝統食です。」と説明されたことを覚えている。今回はそのビワイチ最深部の丘に位置する「丘峰喫茶店」を紹介したい。

店主である堀江昌史さんに連絡を取り、現地で取材することができた。開口一番「この風景を残したい思いでやってます。」と、賤ヶ岳山麓から見渡す涌出山から田上山あたりの山並みと木之本へ広がる平野を指して、勢い良く話された。かと思うと直ぐに「こっちに来てください。」と厨房の裏手へと案内され、「今、私は漬物作りをやっています。小鮎のへしこもありますよ。ほら、ちょうど乳酸菌の良い匂いになってます。」と、桶の中を見せていただいた。風景から漬物への展開は急過ぎて驚いたが、既に本題に入っており、店主のペースに乗っかった。再びテーブル席へ戻り、その特製の漬物セレクションをランチで食すことになる。「トマトの漬物は近くの野菜作り名人から、小鮎は海津の漁師さん…」と次々に素材の出自と紹介が始まった。味の感想を伝える間も無く、気付くと話は再び風景の話に変わっていた。「二〇一七年に開店してから、刻一刻と風景が変化しています。この前、漸くここを店舗兼住居とすることができました。地域の方々と共に田畑で農作物をつくり、日持ちが難しい湖魚を漁師さんから直接買い取って、地域で伝わってきた食を持続していくことに努めています。」と、さらに「地域でその季節にとれる材料を使うことが、この風景を持続することにつながる。この風景が好きで、残したい思いを持つ私に何ができるのか考えた時、私たちが食卓に何を用意できるかだと考えました。」と話された。

昌史さんはギター職人である夫の森下涼平さんと一緒になり、大音に移住して来た。以前は大手新聞社の政治、事件記者をされていたそうだ、昼夜を問わず記事につながる案件の現場に行き、締め切りに追われながらも、真相を追求して記事を書く生活を日々過ごして来たそうだ。今の食生活とは真逆のコンビニ弁当を食べながら、自身の「やるべき仕事に生活（暮らし）を合わす」スタンスであったと振り返る。これはこれで、新聞記者として社会の有様を伝えることや編集スキルをドキュメント映像作家に習うなど、充実していたとのこと。そして記者の仕事に一旦区切りをつけ、これまでの経験と関係性から続く、友人の応援などもあり、自身で出版社「能美舎」を丘峰喫茶開店前の二〇一六年に立ち上げている。代表する出版物に湖北を舞台とする井上靖の名作「星と祭」の復刊や、地域おこし協力隊から活動をはじめ観音ガールの異名を持つ對馬佳菜子の「観音ガールと廻る近江の十一面観音」などがある。いずれも地域文化に熱いコミュニティ「星と祭」復刊プロジェクト発行によるものだ。昌史さんはその主要メンバーでもある。

お話を続けながらも、柚子生姜ソーダやスイカなど地域の採れたて素材を使ったものがテーブルに並んだ。「今は季節や自然に暮らしを合わせる感じかな？　野菜を作付けするタイミングをはかるなど、結構忙しいんですよ！」とつぶやかれていたのが印象に残る。

さて、丘峰喫茶店の名前は、祖父と父が、東京上野で金属粉末製造業をされていた時の会社名が引き継がれているそうだ。昌史さんの実叔母の話によると、丘、峰は二つの山を意味しており、父と祖父の二人の山を示しているとのこと。賤ヶ岳山麓の丘に

位置することから、その名前を引き継いだそうだ。少し後になって、昌史さんは親族の法事の時にお坊さんから上野の会社と琵琶湖のふしぎなつながりを聞くことになる。その仕事場は上野のお山、不忍池近くに位置していた。江戸期初め一六二五年、徳川家光が東叡山寛永寺を建立、家康のブレーンであった天台宗の僧、天海は不忍池を琵琶湖に見立てて、弁天を祀る中之島は竹生島を意味し、この世界観を江戸の地に写したとされている。まさに「丘峰」は「写琵琶湖の地」から「琵琶湖」近くに蘇ったのである。

豊かさとは何か、幸せとは何か、高度経済成長からグローバル化を経験し、コロナ禍において人間の活動が制限される中、その価値が変化する時代にきている。琵琶湖、ビワイチの最深部にある「大音の茶店」は旬の地元の美味しいものを食すことのみならず「自然に暮らしを合わせていく」ことを教えてくれる。

賤ヶ嶽隧道をくぐり抜け、琵琶湖に浮かぶ竹生島を眺め、近江の懐を後にした。

写真23　小鮎のへしこを見せてもらう

写真24　能美舎の出版物が本棚に並ぶ

写真25　特製漬物セレクションランチと鮎のへしこ

写真26　店内厨房でお話する堀江昌史さん

写真27　「丘峰」と記された麻布製暖簾

写真28　賤ヶ岳山麓の「丘峰喫茶店」

写真29　「この風景！」の前に立つ堀江昌史さん

写真31　煉瓦造りの賤ヶ嶽隧道

写真30　賤ヶ岳山麓に伸びる自転車道（夏の大音地区）

写真32　隧道を抜けて目にする「湖に浮かぶ竹生島」

四、黒山（くろやま）の馬

黒山地区は古代から奥琵琶湖における交通の要衝である大浦の北西部に位置している。ビワイチ最北部のトンネル、岩隈第二トンネルを抜け下り坂を下りたあたりからＪＲ湖西線と併走する形で永原小学校を左手に、西浅井体育館を越えて右に折れると永原駅が見える。駅前を通過すると直ぐに左に折れ、大浦川沿いを走るように案内が出るが今回は直進する。少し進むと左手に石仏が見える。ここが長浜市西浅井町黒山地区の入り口にあたる場所だ。集落の中心付近から左に折れて少し進むと田畑との境界付近に原っぱが見える。西側にはマキノ町小荒路へとつながる万字峠を眺望できる。そこに二頭の馬（ポニー）が放牧されているのを発見した。一瞬目を疑ったが、何ともこの光景に溶け込んでおり、家畜との暮らしが持続していると勝手に納得していると馬小屋らしき建物から一人の女性があらわれた。二頭の馬に様々な指示を送り、餌を与えながら手なずけている様子が見える。馬と共に暮らす隅田あおいさんにお話を伺うことができた。

隅田さんは長浜市の地域おこし協力隊として令和元年より黒山地区に移住し、馬と共に暮らしながら、地域協力につながるよう様々な工夫をした活動に日々チャレンジしている。地域おこし協力隊とは、都市地域から移住者を迎え入れ、人口減少や高齢化が著しく進む地域において様々な地域協力活動に従事し、地域への定住を図る取り組みとしている。

開口一番「馬と一緒に暮らしたかったんです。」と話された。物心ついた時には既に動物と暮らすことを考えていたとのこと、高島市出身の隅田さんは大学を卒業後、馬と暮らすために、どのような仕事をすれば馬との関係を築けるか模索が始まる。そこで岩手県や北海道など各地で馬と暮らす人たちの元へ行き、山仕事や林業体験の経験を積むことになる。そこで馬搬（ばはん）（Horse Logging）という仕事、概念に出会う。馬搬とは山で伐採した木材を馬に曳かせて搬出する技術のことであり、人力では動かせないような丸太を馬は木々の合間をぬって運び出し、掛け声と共に人馬一体となる作業だ。条件の良い木を見つけて曳き出し、その材（木）が売買され、使用されていく。林業が生業として巡り巡っていく仕組みを経験されたそうだ。この経験を経て長浜市の地域おこし協力隊にチャレンジすることになるのだが、当然、北海道での馬搬のような仕組みや暮らし、生業が滋賀県長浜市の現在にあるわけでなく、今後の明確なビジョンが見えているわけでは無い。だからと言って諦めないのが隅田さんの面白いところである。長浜市は自伐型林業と定住を推進していることから、この地で馬搬ができる林業を目指し、「この山に価値を見出す」提案をすることで馬との暮らしのチャレンジを始めていくのである。

ここで二頭の馬の紹介をする。白馬でどっしりとした様相の「シラホシヒメ（通称：ヒメ）」とそれより馬体の小さい駁毛（ぶちげ）で、いたずら好きだが愛らしい「クレハ」がいる。どちらも牝馬であり肩までが一四七センチ以下であることからポニーと呼ばれている。隅田さんは、長浜市北部でいくつかの集落を市職員に案内され、黒山地区が気に入り、ここでの生活が始まった。その頃より二頭との共生が始まり今日に至っている。「馬搬どころか、この子たちに信用してもらうこと、心を通わせることで毎日が必死です。」と隅田さんは語る。神経質で敏感な馬との生活は怪我も絶えないとのこと、聞き取りを続けていると馬小屋が目に入った。聞くとどうやら黒山地区の人たちが協力して建ててくださったとのこと、外壁は焼き杉板、ベンガラ等々、様々な材でパッチワークされており、廃材の利用であることが見て取れる。しかしそれがかえってお洒落に映る。このことから隅田さんと馬の生活が黒山地区の人に支えられ、受け入れられていると想像できる。地区の人々に歴史や石碑のことなどを尋ねる際に馬の話をすると、どの人も微笑ましい表情をされていたのが印象的だ。

日を改め十月の休日に訪ねると「午後から公民館近くの公園でイベントなんです！」と隅田さん。年に一度の、仮装して集うイベントに子供たちが集まってくるようだ。その日は小さい方の「クレハ」のお披露目でもあり、隅田さんも会場で仮装して撮影会を開くなど、地域おこしの一端を担っておられた。この他、黒山の原っぱにて馬を眺めながら生木を使ったカトラリー作りのワークショップを開催するなど、活動は始まっている。長浜スタイルの自伐型林業のこれからは未知の領域と想像するが、馬搬

写真33　地域の人々が建ててくれた馬小屋

写真35　万字峠へ向かう林道に程近い場所に位置している

写真34　イベントへ行く準備をする「クレハ」と隅田さん

写真36　「シラホシヒメ」を手懐ける隅田さん

写真37　二頭のポニーと隅田さん

写真39　集落の外れに位置する原っぱ

写真38　イベント会場の公園にて

生活で自立を目指す一つひとつのプロセスを通して、これまでの効率化優先社会で失ってきたものを、取り戻し復活させていける可能性が、たくさんある様に思う。例えば馬が通れる程度の林道整備など…。

コロナの猛威が少しおさまりを見せ、社会は沈黙を跳ね返すが如く、動き出す予兆を感じる中、近江の懐の地は、新たな暮らしと未知の可能性を受け入れている。

追記

本稿では、二〇一九年より続く全世界に拡大した新型コロナウイルス感染症で生活のスタイルを変えざるを得ない状況におかれながらも、各地域で自身の暮らしを中心に据えながら、持続可能なものづくりを続けるクラフトマン、地域の持続に向けて動き出すクリエイター、活動家に共通する姿勢と背景を記した。

コロナ禍の生活がいつまで続くかは、まだ的確な予測をするには困難な状況である。少なくとも、これまでの生活様式を変えていく必要があることをより実感する一年であった。また、気候変動の影響と想像できるゲリラ豪雨に見舞われる事態を何度も経験した。今夏はカラッと晴れ上がる日が何日あったであろうか、ロードバイクに乗ることが日課になりつつある中、部屋に閉じこもる日が続いたことも記憶に残っている。各地では長雨が続き、台風が一定の場所に停滞する様な線状降水帯という気象用語を

何度も耳にした。さらにはその最中に新型コロナウイルス感染症の第五波が押し寄せ、緊急事態宣言が発出された。都市圏を中心とする各地で感染症による重症、中等症患者が瞬く間に増加し、病床が逼迫する状況が続いていることを報道で知ることになる。十月から緊急事態宣言が解かれ、フィールドワークの授業を始めることができた。その中で滋賀県の中山間地域における様々な人と出会い、連携しながら「地域を知る」「地域の素材でつくる」と題した授業を行った。感染状況を気にしながらも、気づいたことの一つに、これまで以上にお互いの立場の分け隔てや、境界が緩やかになった様に感じている。大学と行政、地域、諸団体など、連携しながらも立ち位置は明確にしてきた。しかし常に、非常時という状況下で、感染リスク回避を考えると交流や連携がしにくい事態である。コロナ禍を生きる中で、人と会いにくいことが、尚更、対話する意味、互いを思いやる気持ち、フォローアップする心、即ち「共助の精神」が強くなった様に感じる。共助し合うことで、自身の緊張感を和らげ、結果として自分を助けることにつながるのではないか、社会では様々な形で分断や孤立が起こっている事実も聞こえてくる。近江は近江商人に受け継がれる互助組織の伝統や、地域社会でつくる様々な目的の講が今日も持続している。

「近江の懐」は苦しい時こそ、助け合い、分かち合う「共助の精神」が育まれてきた場であることを教えてくれている。

成安造形大学附属近江学研究所
紀要　第11号

発行日　令和4年3月25日
発　行　学校法人京都成安学園　成安造形大学
附属近江学研究所
〒520-0248
滋賀県大津市仰木の里東4-3-1
電話　077-574-2118
発行者　小嵜善通
編　集　成安造形大学附属近江学研究所
印刷所　株式会社 北斗プリント社

© Seian University of Art and Design 2022
ISSN 2435-4279